

前 煙 K 遺跡

前煙K遺跡

一般県道梨木香林線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



一般県道梨木香林線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

2021

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

前畠 K 遺跡

一般県道梨木香林線道路改良事業に伴う
埋 藏 文 化 財 発 挖 調 査 報 告 書

2021

群 馬 県 桐 生 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、桐生市新里町野に所在し、一般県道梨木香林線道路改良事業に伴い発掘調査が行われた前畠K遺跡の調査報告書です。前畠K遺跡のある桐生市新里町は、古くは岩宿遺跡の発見で著名な相沢忠洋氏が調査フィールドとした地でもあり、武井遺跡、峯岸山遺跡など著名な遺跡が発掘調査された地域です。

前畠K遺跡の発掘調査は、群馬県桐生土木事務所の委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が令和元年12月に実施しました。その結果、中世～近世の堀2条、土坑14基などが発見されました。

調査された範囲は小規模なものです、周辺地域の開発や灌漑などに大きな影響を与えたと考えられ、大規模な堀が検出されました。この堀は、先に調査・報告した前畠J遺跡の堀につながる様相も判明いたしました。また土坑群も西側に偏る傾向が見られ、当地の中世～近世の集落の一部を構成する遺構群と考えられます。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県桐生土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会及び桐生市教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。これらの関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

令和3年7月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

- 1 本書は、令和元年度一般県道梨木香林線道路改良事業に伴い発掘調査された前畠K遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地　群馬県桐生市新里町野62-6、64-3、64-4番地
- 3 事業主体　群馬県桐生土木事務所
- 4 調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査の期間及び体制
 - 履行期間　令和元年11月1日～令和2年2月29日
 - 調査期間　令和元年12月1日～令和元年12月31日
 - 調査面積　439m²
 - 調査担当者　間庭　稔(専門調査役)
 - 遺跡掘削工事　株式会社　測研
 - 地上測量委託　技研コンサル株式会社
- 6 整理作業の期間と担当者
 - 履行期間　令和3年4月1日～令和3年7月31日
 - 整理期間　令和3年4月1日～令和3年5月31日
 - 整理担当者　山口逸弘(専門調査役)
- 7 報告書編集、執筆等担当者
 - (1)編集担当及び本文執筆　山口逸弘
 - (2)デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)
 - (3)遺物実測図・写真・観察表
 - 陶磁器　大西雅広(専門調査役)
 - 土師器・須恵器　神谷佳明(専門調査役)
 - 石器・石製品　岩崎泰一(専門調査役)
 - 鉄滓　板垣泰之(専門員(主任))
 - 縄文土器　山口逸弘
 - (4)遺構写真撮影　間庭　稔
 - (5)石材同定　飯島静男(群馬県地質研究会会員)
- 8 第2図に使用した地図は桐生市長の承認を得て、同市発行の新里町現形図(1/2,500)No.20を複製したものである。
- 9 発掘調査による出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の関係機関にご協力、ご助言をいただいた。記して感謝します。
群馬県県土整備部、群馬県桐生土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、桐生市教育委員会

凡　　例

- 1 本書で使用する測量図の座標値及び方位は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を用いている。挿図中の方位は座標北を表し、座標値の単位はメートルである。
- 2 等高線、遺構断面図基準線に記した数値は海拔標高値である。各ポイントの右脇に○.○mと表示した。
- 3 遺構図、遺物図の縮尺については各挿図中にスケールを貼付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真の縮尺は概ね掲載実測図に準拠するが厳密ではない。
 - 遺構図：堀 1/60、土坑、ピット 1/40、遺構配置図 1/400である。
 - 遺物図：縄文土器 1/2・1/3・1/4、土師器、須恵器 1/3、陶磁器 1/3・1/4、石器・石製品 1/1～1/6、鉄滓 1/2
- 4 遺構番号に関しては、調査区、時期に関わらず通し番号となっている。
- 5 遺物図中の記号、網掛けについては、
 - 土器実測図の記号、網掛けとして、●=含織維、□=畝
 - 石器実測図中の網掛けとして、■=磨り面・摩耗面
- 6 遺構・遺物計測表・観察表の記載については、計測値単位はcmである。残存値は○で記した。
- 7 第1図遺跡位置図は国土地理院1/50,000地形図「前橋及び足利」を使用した。
第2図遺跡配置図は桐生市都市計画課発行新里町現形図(1/2,500)No.20を使用した。
第4図周辺遺跡位置図は国土地理院1/25,000地形図「大胡」「桐生」を使用した。

目 次

序・例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査に至る経過と周辺の環境

第1節 調査の経過と方法	1
--------------	---

1 調査に至る経緯	
-----------	--

2 調査の経過	
---------	--

第2節 遺跡の立地と環境	4
--------------	---

1 地理的環境	
---------	--

2 歴史的環境	
---------	--

第3節 基本土層	8
----------	---

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	9
-----------	---

第2節 堀	9
-------	---

第3節 土坑	16
--------	----

第4節 ピット	22
---------	----

第5節 遺構外出土遺物	24
-------------	----

第3章 工事立会時の遺構と遺物

第1節 経緯と結果	31
-----------	----

第2節 出土遺物について	31
--------------	----

第4章 総括	33
--------	----

遺構計測表・遺物観察表	34
-------------	----

写真図版

抄録

插図目次

表 目 次

第1回	遺跡位置図(国土地理院1/50,000地形図「前橋」「桐生及び足利」を使用)	1
第2回	遺跡配置図(群馬市市計画課発行新里町現形図(1/2,500)No.20を使用)	2
第3回	遺跡位置図(1/400)	3
第4回	周辺地図位置図(国土地理院1/25,000地形図「大胡」「桐生」を使用)	5
第5回	基本土層	8
第6回	1号塙(1)	10
第7回	1号塙(2)	10
第8回	1号塙(3)	11
第9回	1号塙(4)	12
第10回	1号塙(5)	14
第11回	2号塙	15
第12回	1～5号土坑	17
第13回	6～12号土坑	20
第14回	13～14号土坑	21
第15回	1～9号ピット	23
第16回	遺構外出土遺物(1)	25
第17回	遺構外出土遺物(2)	26
第18回	遺構外出土遺物(3)	27
第19回	遺構外出土遺物(4)	28
第20回	遺構外出土遺物(5)	29
第21回	遺構外出土遺物(6)	30
第22回	保護課立会議による1号塙と2号塙及び 遺構外出土土器	32

第1表	周辺遺跡一覧表	6
第2表	地計測表	35
第3表	土坑計測表	35
第4表	ピット計測表	35
第5表	1号層出土遺物觀察表	36
第6表	2号層出土遺物觀察表	37
第7表	3号土坑出土遺物觀察表	37
第8表	6号土坑出土遺物觀察表	37
第9表	11号土坑出土遺物觀察表	37
第10表	遺構外縁出土遺物觀察表	38
第11表	保護課社会調査による1号層と2号層及び 遺構外縁出土遺物觀察表	41

図版目次

P.L. 1	1	1 区全層(北から) 2 区全層(北から)
P.L. 2	1	1 区1号層全層(北から) 2 1区1号層全層(南東から)
P.L. 3	1	1 区1号層西北上層(東から) 2 1区1号層東北上層(西から) 3 1区1号層底面(西から) 4 1区1号層凹面(東から) 5 2区2号層全層(東から) 6 2区2号層凹面(南東から) 7 2区2号層上層(東から) 8 2区2号層凹面(北から)
P.L. 4	1	1 区1号土坑全層(北東から) 2 1区2号土坑全層(南から) 3 1区3号土坑全層(東から) 4 1区3号土坑遺物出土状況(北から) 5 1区4号土坑全層(北から) 6 1区5号土坑全層(東から) 7 1区6～8号土坑全層(東から) 8 1区7号土坑全層(東から)
P.L. 5	1	1 区8号土坑全層(東から) 2 1区9号土坑全層(東から) 3 1区10号土坑全層(東から) 4 1区11号土坑全層(東から) 5 1区12号土坑全層(東から) 6 1区13号土坑全層(南から) 7 1区14号土坑全層(北から)

P.L. 6 1 1区1号ピット全景(東から)
 2 1区2号ピット全景(南から)
 3 1区3号ピット全景(東から)
 4 1区4号ピット全景(東から)
 5 1区5号ピット全景(南から)
 6 1区6号ピット全景(南から)
 7 1区7号ピット全景(南から)
 8 1区8号ピット全景(南から)
 9 1区9号ピット全景(南から)
 10 1区1号調査風景(南から)

P.L. 7 1 号坑出土遺物

P.L. 8 1・2号坑、土坑出土遺物

P.L. 9 道構外出土遺物

P.L. 10 道構外出土遺物

P.L. 11 道構外出土遺物

P.L. 12 道構外出土遺物

P.L. 13 1 梨木香林縦立会地點全景 (北西から)
 2 梨木香林縫 1・2号掘断面 (西南から)
 3 梨木香林縫 1号掘全景 (南東から)
 4 梨木香林縫 1号掘全景 (南から)
 5 梨木香林縫 2号掘全景 (北東から)
 6 梨木香林縫 調査風景 (北西から)
 山土遺物

第1章 調査に至る経緯と周辺の環境

第1節 調査の経過と方法

1 調査に至る経緯

前畠K遺跡は、桐生市新里町野に所在する遺跡で、令和元年度一般県道梨木香林線道路改良事業に伴って、令和元年12月に発掘調査された遺跡である。

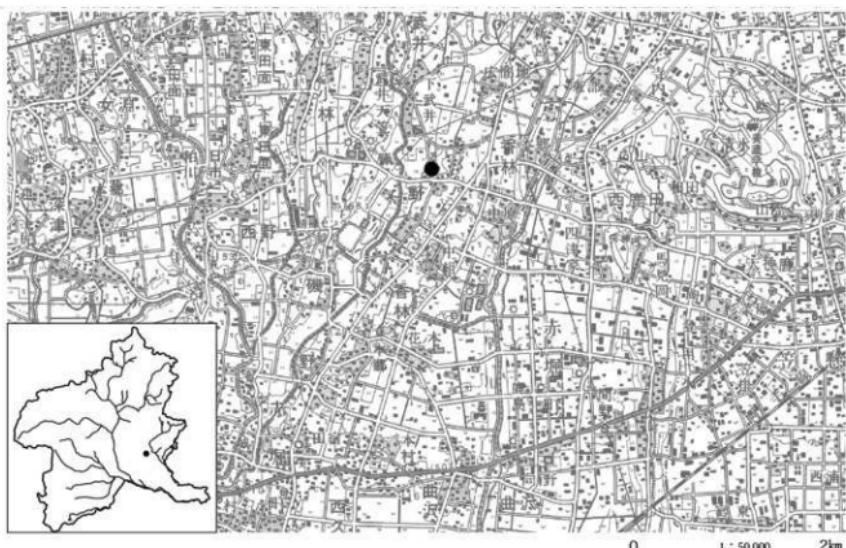
群馬県桐生土木事務所(以下桐生土木)は一般県道梨木香林線道路改良事業を進めるにあたり、平成30年5月群馬県知事部局県土整備部建設企画課をとおして、群馬県教育委員会文化財保護課(以下保護課)に照会した。これを受けた保護課は同年6月、当該事業地が周知の埋蔵文化財泡蔵地である野-01遺跡(桐生市遺跡番号B0183)内にあること、さらに先に行われた一般県道笠懸赤堀今井線道路改良事業に伴う発掘調査地(前畠J遺跡)に隣接することから、確認調査の必要がある旨の回答をした。そのため桐生土木は同年10月、保護課に試掘・確認調査の実施を依頼した。

保護課による試掘・確認調査は平成30年11月に行われ、遺構の存在、遺構の時代・種類、予想遺構量を確認した。その結果、確認調査対象地のうちの一部に対し遺構と遺物が確認されたため本調査が必要と判断された。

この結果を基に保護課は桐生土木に対して、試掘・確認調査の依頼範囲の一部で、事業を実施するにあたり埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨を通知した。桐生土木は令和元年10月、桐生市教育委員会に通知し、同日桐生市教育委員会は群馬県知事に進達を行った。

なお、遺跡名称に関しては桐生市教育委員会と保護課の協議の結果、「前畠K遺跡」として位置付けた。

このように、前畠K遺跡は保護課試掘・確認調査を受け、令和元年、桐生土木事務所からの委託を受け、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下事業団)が実施することになり、調査期間を令和元年12月1日より令和元年12月31日の1ヶ月間、面積439m²を対象に行うことになった。



第1図 遺跡位置図(国土地理院 1/50,000 地形図「前橋」「桐生及び足利」を使用)

2 調査の経過

発掘調査は、事業団からは調査担当者1名があたり、遺跡掘削請負会社の現場代理人と発掘作業員が遺跡掘削工事を行った。

調査着手にあたって、調査地が県道336号梨木香林線の脇であることや、周辺の住宅地や通学路あることに配慮し、道路脇の安全対策として、ロープステックと防塵網を設置し調査を開始した。また調査区は南北に長いため、西側住宅地への進入路で区切り北側を1区、南側を2区とした。

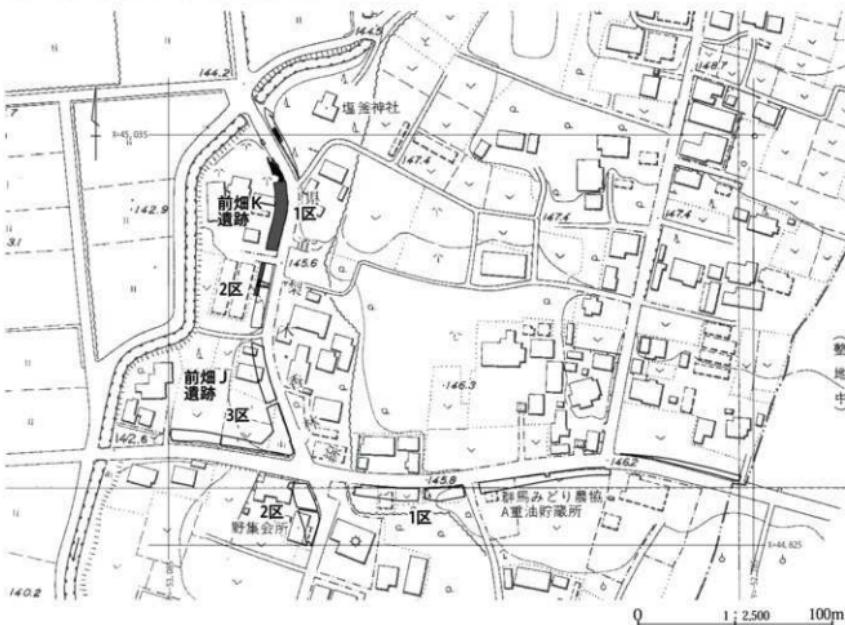
調査地内は直径1m程の樺、杉、椿の切り株が複数点在しており、表土掘削にあたり切り株除去による遺構面の破壊を防ぐため、重機を使用せず人力による表土掘削及び遺構確認作業を行った。切り株の間を縫って、5箇所のトレンチを設定して掘削を進めた。なお、切り株の少ない1区南側と2区に関しては重機を使用して表土掘削を行い、遺構確認、精査を人力で行った。その結果、中世～近世に比定される堀2条、土坑14基、ピット9基

が調査された。また、旧石器時代の遺構・遺物の確認調査を1区で2箇所の調査坑を設定したが、遺物の出土は見られなかった。

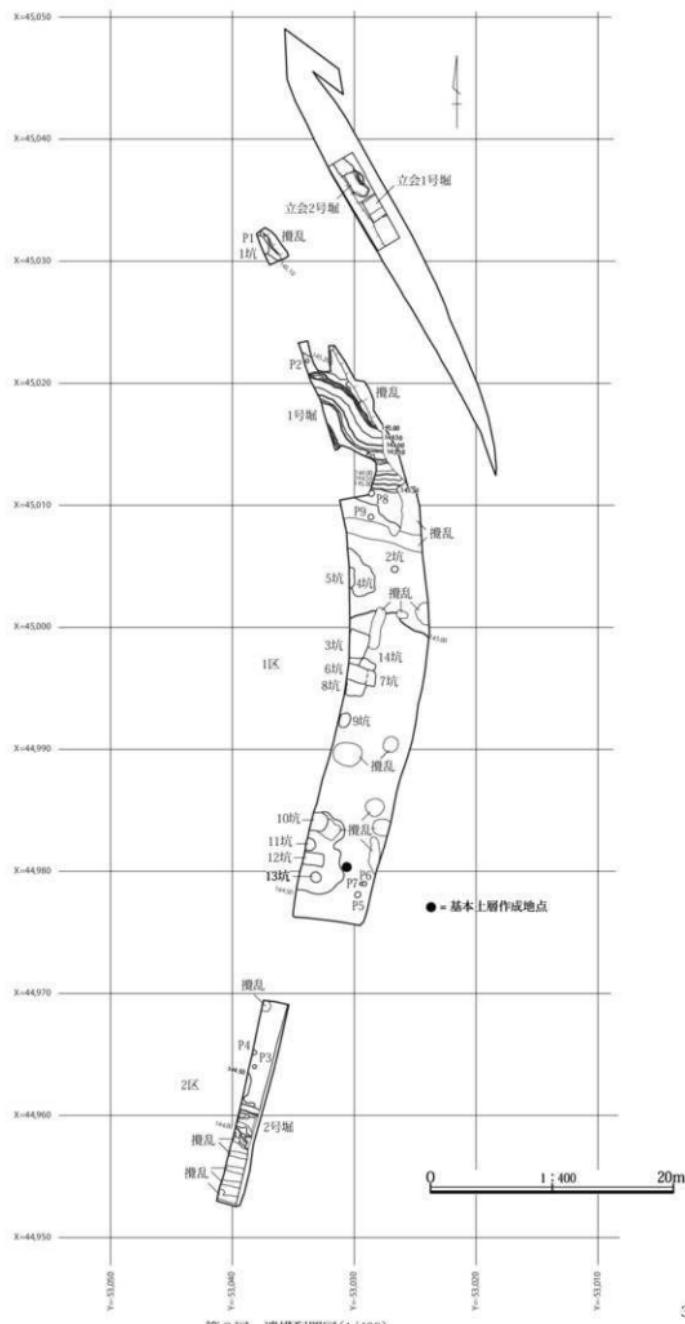
遺構の記録化に関しては、遺構の測量については主に測量会社に委託してデジタル化した記録を取った。縮尺については大型遺構である1号堀平面図は1/40、その他の平面図と断面図は1/20で作成した。また、全体図は1/200で記録化した。遺構の個別写真は発掘調査担当者によるもので、主にフルサイズデジタルカメラ35mmと中判カメラを用いた。

以下調査日誌抄を掲載する。

令和元年	
12月2日(月)	事務所設営・賃財など搬入。表土掘削、安全対策。
12月3日(火)	遺構確認着手(1・2区)
12月4日(水)	トレンチ調査を併行 ~9日
12月10日(火)	1号堀調査着手 ~20日
12月11日(水)	1・2区土坑・ピット調査
12月16日(月)	2区調査終了
12月18日(水)	1号堀と4号土坑調査終了
12月19日(木)	旧石器試験坑調査 ~20日
12月20日(金)	1区調査終了
12月23日	調査区整理の戻し
12月24日	事務所・賃財など撤収 ~27日



第2図 道路配置図(桐生市都市計画課発行新里町現形図(1/2,500)No.20を使用)



第3図 遺構配置図(1/400)

第2節 遺跡の立地と環境

前畠K遺跡は桐生市新里村野地内にあり、県道336号梨木香林線と県道352号笠懸今井線の交差点である「野」から100m程北側に位置する。本節では、前畠K遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境について概観する。

1 地理的環境

桐生市新里町は赤城山南東麓に位置する。その大半が赤城火山の南麓斜面地に属し、前畠K遺跡周辺は赤城山南麓と大間々扇状地桐原面が接する箇所にあたる。

大間々扇状地は、第四紀更新世後期の渡良瀬川によって形成された地形とされ、形成時期の異なる桐原、岩宿、藪塚、相生の四地形面からなる合成扇状地である。遺跡の乗る桐原面は大間々扇状地の西側半分の面積を占めるもので、湯ノ口軽石層より上層の中部ローム層に覆われている。桐原面には早川を中心とした谷が3本樹枝状に発達している。現在も早川は渡良瀬川と枯谷でつながっており、かつて渡良瀬川が早川を流れていた頃の痕跡を物語る(新里村教委2003)。

前畠K遺跡の立地する台地は大間々扇状地の桐原面西端にあたり、調査区の西側には前述の鍋木川とその分岐支流である蛭川が形成した冲積地が展開し、現在は水田地帯に供されている。この水田地帯と調査区周辺の比高差は約2.7mを測る。また、調査区周辺は西側への緩やかな傾斜が広がりながら、北側へ徐々に高くなる。その比高差は約1mで調査区内及びその周辺は、ほぼ平坦面が広がる地点といえよう。

2 歴史的環境

桐生市新里町内の遺跡としては、かつては岩宿遺跡の発見で著名な相沢忠洋氏が発見・調査された遺跡が数多く周知されている。その後、土地改良事業等によって多くの遺跡が発掘調査され、時期も旧石器時代から近世に至る多様性に富む遺跡相を示している。新里町内の遺跡と歴史的環境については、新里村教委や合併後の桐生市教委の報告書に詳細が述べられている。また、近年では本遺跡に近接する前畠J遺跡(群埋文2019)や武井峯岸V遺跡(群埋文2019)における報告書で周辺遺跡の詳細が述

べられている。そのため、本書では周辺遺跡として近距離にある遺跡を一覧し、そのうち大字野地内の遺跡概要を紹介しておきたい。

本遺跡が位置する箇所は県遺跡台帳で「野No1」、市町村遺跡番号で「B0183」として周知されている。南北に延びる台地を範囲としており、単独の遺跡ではなく、前畠遺跡(7)、東畑遺跡(53)、一本木遺跡(15)、蛭川遺跡(5)などが複合した包蔵地である。発掘調査歴としてはかつて相沢忠洋氏による東畑遺跡の調査で敷石住居跡が検出されており、学史上も重要な地域である。その後、桐生市に合併前の新里村教育委員会の調査が精力的に行われ、昭和62年に西久保遺跡(8)、蛭川遺跡が県営圃場整備事業で調査されている。西久保遺跡では古墳時代～古代の竪穴建物6棟、縄文時代後期前葉の竪穴建物1棟、蛭川遺跡では古墳時代～古代竪穴建物が172棟、掘立柱建物跡2棟が検出されている。

圃場整備関連の調査後、当地域の発掘調査は個人住宅建設に伴う例が主体を占める。また昭和63年度に前畠B遺跡(7)が、平成元年度は前畠C遺跡(7-2)と前畠D遺跡(7-3)の調査が行われている。平成5年度には東畑A遺跡(6)、平成6年度には觀音寺遺跡(4-2)が調査されている。また、野No2の範囲内になるが北原A遺跡(52)が平成5年度に調査されている。平成8年度に前畠F(7-4)遺跡、9年度に蛭川II遺跡(5-2)、12年度に東畑C遺跡(53-2)、平成16年度に東畑D遺跡(53-3)が調査されている。東原D遺跡は個人土地改良を原因とする。

以下主な調査遺跡の概要を記す。

前畠B遺跡は古墳時代～古代の竪穴建物を9棟調査し集落域の東端部を検出した。前畠C遺跡は古墳時代の竪穴建物2棟、土坑2基、井戸跡1基を調査した。前畠D遺跡では縄文時代竪穴建物6棟、古墳時代～古代の竪穴建物32棟、掘立柱建物跡2棟など検出された遺構量が多い。前畠F遺跡も調査遺構量が多い。縄文時代竪穴建物17棟、古墳時代～古代竪穴建物27棟、土坑47基などである。特に縄文時代遺物の中には後期～晚期に比定される耳飾り、土版などが見られ注目されよう。

蛭川II遺跡は古墳時代の竪穴建物1棟と土坑2基が調査された。圃場整備で大規模な集落を検出した蛭川遺跡の対岸にあたる。遺構密度は低く集落域の北限とされて

いる。

東畠A遺跡の調査では土坑1基のみの検出に止まつた。その他に多量の縄文時代中期土器や中世～近世陶磁器が出土しており、相沢氏の調査した敷石住居跡を加えると当遺跡の多様性が窺われる。東畠C遺跡は古代の竪穴建物1棟の他、近世～近代の土坑、近世豪棺墓、中世の溝などが調査されている。東畠D遺跡では郡境と目される溝や土坑、埋没谷が調査され、旧石器時代の剥片類も得ている。

観音寺前遺跡は蛭川遺跡の延長で台地部分での調査となつた。調査された遺構は縄文時代竪穴建物2棟、古墳時代～古代の竪穴建物8棟、古墳時代後葉の古墳周溝(観音寺古墳)、中世～近世の溝、弘仁地震を要因とする地割れなどである。

北原A遺跡は野野2にあたる。発掘調査では古墳時代後葉の竪穴建物1棟、溝状遺構などである。なお、溝状遺構埋土中より槍先形尖頭器が出土している。

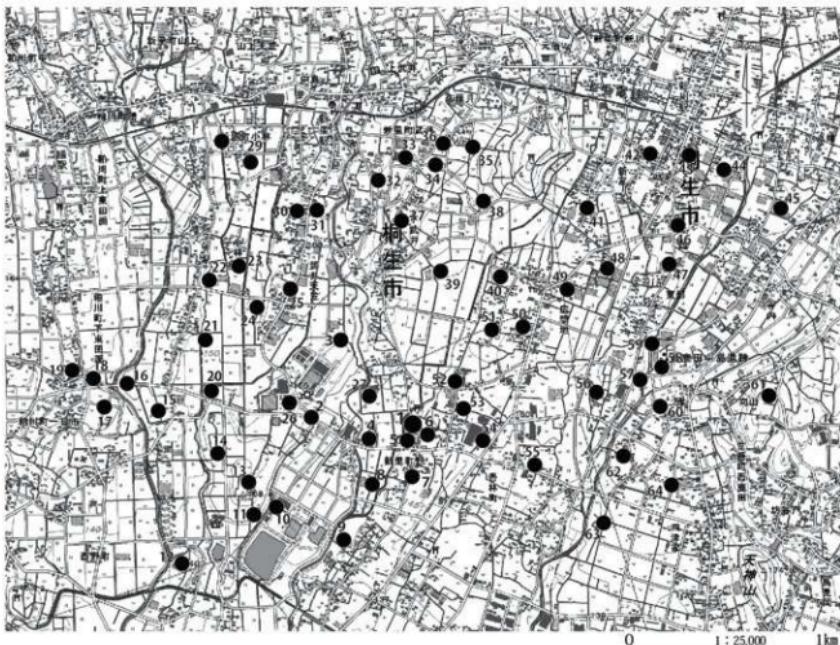
また野野1東側は伊勢崎市との市町村境があり、東に

接する香林西ノ原遺跡(54)は伊勢崎市(旧赤堀村)に属する。古墳時代～古代の集落遺跡である。

なお、当事業団で発掘調査、報告書刊行した前畠J遺跡は縄文時代～平安時代までの複合遺跡とされている。内訳として、

縄文時代の遺構は、縄文時代前期後葉竪穴建物4棟、中期中葉末1棟、竪穴状遺構では前期後葉2基、後期中葉1基、土坑84基、屋外か中期1基、中期中葉末の遺物集中1箇所が報告されている。前期後葉の遺構からは諸磯b式や「茶屋類型」、浮島式の伴出が確認されている。土坑出土土器は前期後葉～後期後葉と時間幅が広い。特に後期後葉に比定される異形台付土器は注目されよう。

古墳時代～中世遺構としては、古墳時代に比定される竪穴建物6棟(前期1棟)、奈良・平安時代が2棟調査されている。また、古墳時代～中世の土坑18基、井戸2基、溝1条が報告されている。このうち溝は本遺跡2区で調査した2号堀と同一遺構であり、直線的な走行が確認された。



第4図 周辺遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 地形図「大胡」「桐生」を使用)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献 No.
1	前畠 K									本報告
2	武井峠岸Ⅴ	●	●						●	47
3	武井の脇				●					26
3-2	武井	●								
3-3	峠岸(武井遺跡峠岸 地区を含む)	●	●	●	●	●				29,41
3-4	武井内出東	●		●	●	●				23
4	觀音寺古墳			●						40
4-2	觀音寺	●	●	●	●	●	●	●		21
5	鶴川	●	●	●	●	●	●			24
5-2	鶴川Ⅱ	●	●	●						20
6	東畠 A	●	●	●			●			21
7	前畠 B				●	●	●			22
7-2	前畠 C		●	●	●	●	●			22
7-3	前畠 D	●		●	●	●				22
7-4	前畠 F	●	●	●	●	●	●			20
7-5	前畠 J	●	●	●	●	●	●	●		48
8	西久保		●							24
9	南原	●	●	●	●	●				40
10	十二社横穴墳				●					40
10-2	十二社	●	●	●						17
11	十二所(磯十二所遺 跡を含む)	●	●	●						3
11-2	十二所古墳			●						7
12	天籟城		●	●		●				6, 7, 26
13	峠岸山遺跡 V	●	●							
14	峠岸山古墳群	●	●	●	●					1, 2, 4
15	小林一本木		●							23
16	蕨沢				●	●				23
17	前橋市0912(開後 百々日本)		●							12
18	前橋市0692(堤瀬、 一日市宿後)		●	●	●	●				12,13,43
19	前橋市0890(一日市 城)					●				26,30
20	小林峠岸	●	●							23
21	日横	●	●	●	●	●				23
22	小林前田				●	●	●			23
23	日横 A				●	●	●			22
24	田場 I	●			●	●	●			17
25	内出 II				●	●	●			16
25-2	内出 III				●	●	●			19
25-3	内出 IV	●			●	●	●			25
26	小林 5 号墳		●							39
26-2	小林 6 号墳		●							39
26-3	小林 7 号墳		●							39
26-4	小林 13 号墳		●							39
26-5	小林 14 号墳		●							39
26-6	小林 15 号墳		●							39
26-7	新里 23 号墳		●							8
26-8	峠岸山	●	●	●	●	●	●			35,36
27	生目	●								36
27-2	生目 II			●	●	●	●			15
28	天笠南	●	●	●	●	●	●			37
28-2	天笠南 C				●	●	●			20
28-3	天笠南 E	●	●	●	●	●	●			18
28-4	天笠南 F				●	●	●			18
28-5	天笠南 G				●	●	●			18
28-6	天笠南 I				●	●	●			16
29	石山西					●				21
29-2	石山西 IV					●				18

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献 No.
29-3	石山西 V			●	●	●	●			15
30	内出 I			●	●	●	●	●	●	20
31	石山東 I			●	●					20
32	鏡守 II			●						18
33	高畔				●	●				23
34	梨子木			●						22
34-2	梨子木 A			●	●	●	●			22
34-3	梨子木 C			●	●	●	●			21
34-4	梨子木 H				●	●	●	●	●	20
34-5	梨子木 L				●	●	●	●	●	25
35	金井 IV				●	●	●	●		18
36	金井 V				●	●	●	●		18
37	武井の内出					●				26
37-2	山内出					●				39
37-3	山内出 A					●	●	●	●	22
37-4	山内出 B					●	●	●	●	16
37-5	山内出古墳					●				28
38	金井 III				●	●	●	●		20
39	向赤坂				●					39
40	広間地西 II				●					21
41	新宮				●	●	●	●		24
41-2	新宮 F				●					21
41-3	新宮 G				●	●	●			21
41-4	新宮 H				●					18
42	新宮 J					●			●	17
43	下宿東					●	●			21
44	大屋元屋敷		●	●	●	●	●	●		18
44-2	大屋元屋敷 II				●	●	●			16
45	新田八幡				●					22
45-2	新田八幡 II				●	●	●	●		42
46	大屋 B		●	●	●	●	●			21
46-2	大屋 C		●	●	●	●	●			21
46-3	大屋 D		●	●	●	●	●			21
46-4	大屋 E		●	●	●	●	●			21
46-5	大屋 G		●	●	●	●	●			20
46-6	大屋 H		●	●	●	●	●			20
46-7	大屋 I		●	●	●	●	●			20
46-8	大屋 N		●	●	●	●	●			17
46-9	大屋 P		●	●	●	●	●			16
47	磯 C			●	●	●	●			22
47-2	磯 E				●	●	●			18
47-3	磯 L				●	●	●			15
48	広間地東				●	●				40
49	広間地				●	●	●			23
49-2	広間地東 B				●	●	●			38
50	広間地東 A					●	●			21
51	広間地西				●	●	●			21
52	北原 A				●	●				21
53	東畠				●					39
53-2	東畠 C				●	●	●	●		18
53-3	東畠 D				●	●	●			17
54	香林西ノ原				●	●				5
55	道上				●	●	●			27
56	赤井戸				●	●	●	●		33,34
57	長昌寺開山塙古墳					●				9
58	西鹿田中島(中島遺 跡、西鹿田遺跡を含む ?)					●	●	●	●	11,29, 46
59	新川前田 A				●					14,23

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献No.
60	西原			●						9
61	神社裏	●	●	●						9,10, 28,44
62	西原南		●							9
63	西鹿田高橋		●	●						9
64	山西				●					9

引用文献

- 赤堀村教育委員会 1975『赤堀村峠岸山の古墳!』
- 赤堀村教育委員会 1976『赤堀村峠岸山の古墳!』
- 赤堀村教育委員会 1987『下触下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報』
- 赤堀村教育委員会 1994『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告書40号』
内道跡発掘調査概報
- 赤堀村教育委員会 2001『平成12年埋蔵文化財発掘調査報告』
- 赤堀村教育委員会 2006『天笠南遺跡』
- 伊勢崎市教育委員会 2012『伊勢崎市道路分布図』
- 岩澤正作 1933『新里村郷土大観・新里村史跡保存会』
- 笠懸村誌編さん室1983『笠懸村誌 別巻 資料編 全然編・原始古代編』
- 笠懸町教育委員会 1995『笠懸町内道跡!』
- 笠懸町教育委員会 2003『西鹿田中島遺跡発掘調査報告書(1)』
- 柏川村教育委員会 1985『柏川村の道路一遺跡詳細分布調査報告書』
- 柏川村教育委員会 1988『堤頭道路』
- 桐生市教育委員会 1994『新川前田山遺跡(その1)』
- 桐生市教育委員会 2008『平成17・18年度発掘調査概報』
- 桐生市教育委員会 2010a『桐生市内道跡発掘調査報告平成19・20年度調査』
- 桐生市教育委員会 2010b『新里地区道跡群発掘調査報告』
- 桐生市教育委員会 2011『新里地区道跡群発掘調査報告』
- 桐生市教育委員会 2012『桐生市内道跡発掘調査報告平成21・22年度調査』
- 桐生市教育委員会 2012『新里地区道跡群発掘調査報告』
- 桐生市教育委員会 2013『新里地区道跡群発掘調査報告IV』
- 桐生市教育委員会 2014『新里地区道跡群発掘調査報告V』
- 桐生市教育委員会 2015『新里地区道跡群発掘調査報告VI』
- 桐生市教育委員会 2016a『新里地区道跡群発掘調査報告VII』
- 桐生市教育委員会 2016b『桐生市内道跡発掘調査報告平成25・26年度調査』
- 群馬県教育委員会 1989『群馬県の中世城館』
- 群馬県教育委員会 2010『道上遺跡』
- 群馬県史編さん委員会 1986『群馬県史 資料編2 原始古代2』群
馬県
- 群馬県史編さん委員会 1988『群馬県史 資料編1 原始古代1』群
馬県
- 山崎一 1971『群馬県古城跡の研究 上巻』群馬県文化事業振興
会
- 周東隆一 1950『群馬縣新田郡笠懸村中島遺跡調査報告書(第一報)
—主として地表採集による概報—』「両毛古代文化」2 pp38-45
両考古学会
- 周東隆一 1951『赤城山南麓における特色ある弥生式土器とその分
布』「日本考古学協会第8回総会研究発表要旨」pp13-16 日本考古
学会
- 周東隆一 1953『赤城山南麓における特色ある弥生式土器とその分
布(第2報)』「日本考古学協会第11回総会研究発表要旨」pp13-16 日本考古
学会
- 蘭田芳雄 1975『(b)赤井戸式土器』『峠岸山遺跡発掘調査報告(第
一次)』pp37-38 新里村教育委員会
- 新里村教育委員会 1975a『峠岸山遺跡発掘調査報告(第一次)』
- 新里村教育委員会 1975b『峠岸山遺跡発掘調査報告(第二次)』
- 新里村教育委員会 1981a『天笠南遺跡』
- 新里村教育委員会 1982『上鶴ヶ谷遺跡』
- 新里村教育委員会 1984a『新里村の遺跡』
- 新里村教育委員会 1984b『新里の遺跡表』
- 新里村教育委員会 1988『駿東D道路・新川八幡Ⅲ道路』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『前橋町一日市宿後遺跡』
- みどり市教育委員会 2010b『みどり市内道跡 1』
- みどり市教育委員会 2016『みどり市内道跡 7』
- みどり市教育委員会 2017b『西鹿田中島遺跡発掘調査報告書(2)』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2019『武村峠岸遺跡V』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団2019『前堀』遺跡

第3節 基本土層

ここでは、前畠K遺跡の基本土層を述べる。前述のように、本遺跡は大間々扇状地桐原面の南西端にあたり赤城山南麓斜面地が迫る地点でもある。赤城山南麓斜面地形に立地する近距離の旧石器時代遺跡としては、武井峯岸V遺跡(群埋文2019)が調査されており、報告書で詳細に基本土層が述べられている。さらに、本遺跡南に隣接する前畠J遺跡でも基本土層がIX層まで提示されている(群埋文2019)。このことからも当地域の基本土層については、武井峯岸V遺跡、前畠J遺跡両遺跡の報告に詳しい。そのため本書では1区南側で設けた旧石器試掘坑Bトレーニングで得られた土層図を基本土層とし、土層注記を併記し周辺遺跡との比較に役立てたい。なお、土層番号は前畠J遺跡や武井峯岸V遺跡の柱状図番号と分別するため算用数字を用いた。

1層はいわゆるローム漸移層であり、この上位に表土層が堆積する。本来ならば縄文時代や古墳時代～古代の遺物包含層である黒褐色土や暗褐色土が表土層下に認められるが、本遺跡の場合は数cmの堆積にとどまり、包含層の堆積は薄かった。

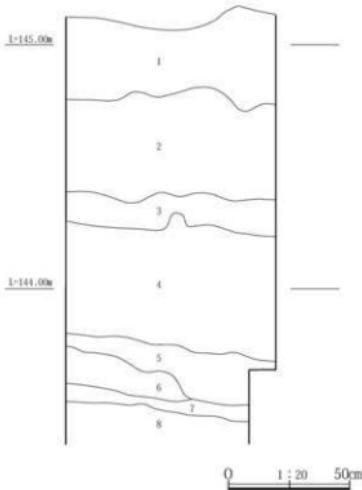
故に本遺跡の遺構確認層は主にローム漸移層で行われた。地点によっては表土からの攪乱層が著しく、軟質ロームで確認された遺構もある。

2・3層は軟質ロームである。3層は灰褐色土塊を含むため分離した。層位下端面の不連続面は顕著では無かった。浅間板鼻黄色軽石(As-YP)が確認されるが少量である。

4層は硬質ロームである。厚く堆積しており40～50cmの層厚を測る。白色粒・褐色粒をAs-YPと判断するかあるいは他の浅間系の軽石か不明である。少量のため確定できなかった。

5層、硬質ロームで4層よりやや暗い色調を示す。

6～8層 暗色帶に相当する層位だが、互層になる傾向を示しており判然としなかった。



Bトレーニング土層(旧石器試掘)

- 1 褐色土(7.5YR4/4) 白色粒・褐色粒を微量含む。漸移層
- 2 褐色土(7.5YR6/8) 白色粒・褐色粒を微量含む。軟質ローム上層
- 3 褐色土(7.5YR6/8) 灰褐色塊を多く含む。軟質ローム下層
- 4 褐色土(7.5YR6/8) 白色粒・褐色粒を微量含む。硬質ローム
- 5 褐色土(7.5YR6/8) 下層軽石粒を少量含む
- 6 明褐色土(7.5YR5/8) 大粒の軽石を多く含む
- 7 暗褐色土(7.5YR8/6) 小粒の軽石を多く含む
- 8 明褐色土(7.5YR5/8) 白色粒・褐色粒を微量含む

第5図 基本土層

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

前畠K遺跡は桐生市新里町野地内に所在する。周辺は赤城山南麓裾野と大間々扇状地の接点であり、低台地が展開する平野部である。調査地点は台地上にあり、ローム層が被覆する箇所である。

先に調査された、前畠J遺跡が南側に接しており、遺構・遺物の延長が予想された調査である。しかしながら、検出された遺構は少なく、中世～近代に比定される堀2条、ほぼ同時期の土坑14基、ピット9基が検出されたのみである。前章でも述べたように、調査は北側の1区、南側に2区の調査区を設けたが、遺構の主体となったのは1区で、堀1条、土坑14基、ピット7基である。2区では堀1条、ピット2基の検出に止まる。いずれの遺構も堀廻時期は中世～近代に求められている。

第2節 堀

1号堀(第6・7図 PL. 2・3)

位置：調査区北側の1区で調査された。座標位置はX=011～020-Y=-025～-033である。周辺の地形はほぼ平坦面が広がるが、微地形としては南から北への緩やかな傾斜地形が観察され、北西側の水田地形に延長する様相を示していた。

経過：本遺跡最大規模の遺構で、調査着手より終了まで9日を要し終盤段階まで記録化を続けた。遺構平面形はローム漸移層で確認した。埋土との色調差は明瞭で、暗褐色～黒褐色を呈する軟質土を埋土の主体とする。調査深度は遺構確認面より約2m近くあり、硬質ローム層や軽石層を掘り抜き、基本土層最下層の明褐色土まで達していた。そのため人力作業による耕土は手間がかかった。また、調査区南西壁際に大型の木根が掛かり、これを除去すると、堀壁面及び調査区壁面の強度が弱くなるため安全上やむなく残存せることになり、その結果、堀全体制の把握は良好には果たせなかった。

規模：走行は北東から北西に蛇行する平面形で、北西側

が低く、南東側との比高差は約5cmを測る。堀上端の幅は約4.7mで広く大型の堀といえよう。底面幅は約1.6mで更に底面で約25～40cm幅の小溝が一段低く走行するため、一部で築研状の断面形を示していた。断面形全体感は箱型状を呈す。さらに、北西側の土層觀察において、北西端部地点で堀外に黒褐色土による高まりを見ることができた。あるいは堀脇の盛り土の可能性もあるが全容を把握出来なかつたため、確定的ではない。

重複：重複遺構は見られなかった。北側に2号ピット、南側に8号、9号ピットが近接する。いずれも50cm近い掘り込みで、あるいは柵列などの堀に伴う施設の可能性も想起されよう。また、北西側の土層断面中央に溝状の掘り込みを見る。おそらく、木根による擾乱層と思われるが、堀再利用の痕跡としても検討できる。

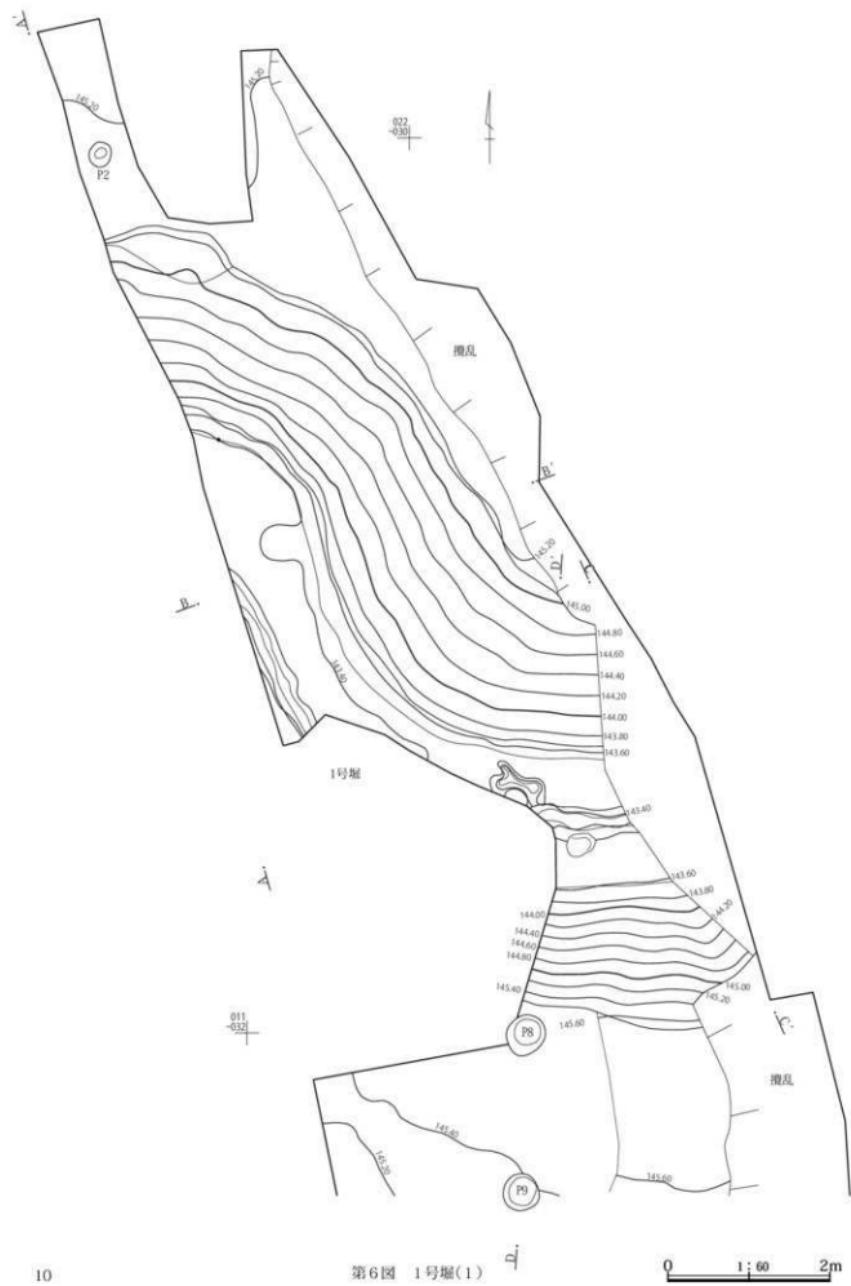
遺物：出土遺物は埋土上層より、近・現代のガラス瓶破片などが出土した。中層から底面にかけて中世～近世の陶磁器類・石製品、古墳時代土師器・鉄滓、繩文土器片・石器などが出土した。このうち、中世～近代に比定される遺物を第8～10図に図示した。堀の時間幅としては、中世～近世を主として、一部凹みが近・現代にまで残るものと考えた。土師器及び繩文土器は調査区域外の当該集落からの流れ込みと判断できよう。

所見：大型の堀で中世～近世に供された例と考えた。堀北西側の調査区域外延長上には民家北側の大きな段差が認められ、現在もその痕跡を見る事ができる。堀の性格は不明だが、堀の規模やクランク状に蛇行する形状から、貯堀などの規格性を伴う施設の堀ではなく、灌漑用堀の可能性を示唆したいが、堀断面に水利などによる鈍化した痕跡も見られず、僅かに水性の堆積土が最深部に認められるのみで、水利としての積極的な材料にはなり得ない。限られた調査範囲のため、堀の性格にまで言及できないが、当地に於ける中世～近世の大型開発遺構として位置付けられよう。

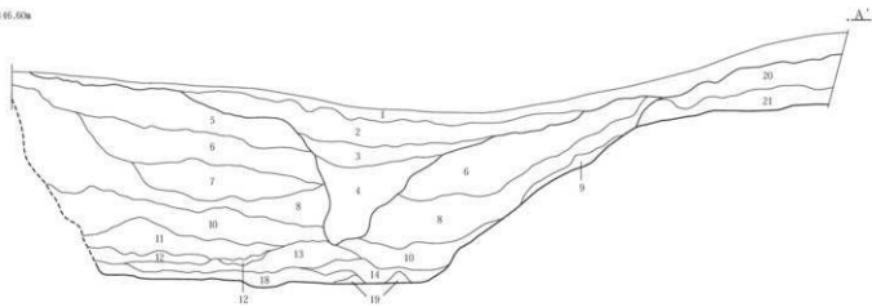
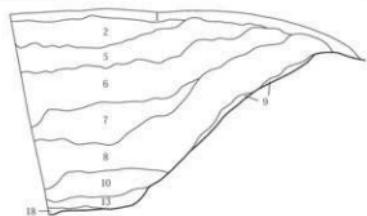
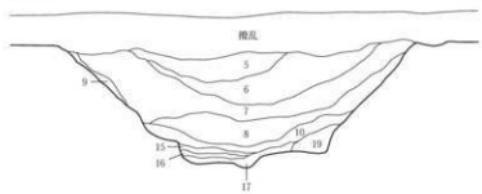
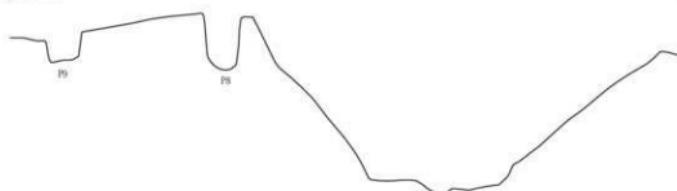
2号堀(第8図 PL. 3)

位置：調査区南にあたる2区中央で検出された。座標位置はX=957・960-Y=-037～-039である。調査区内では

1号堰



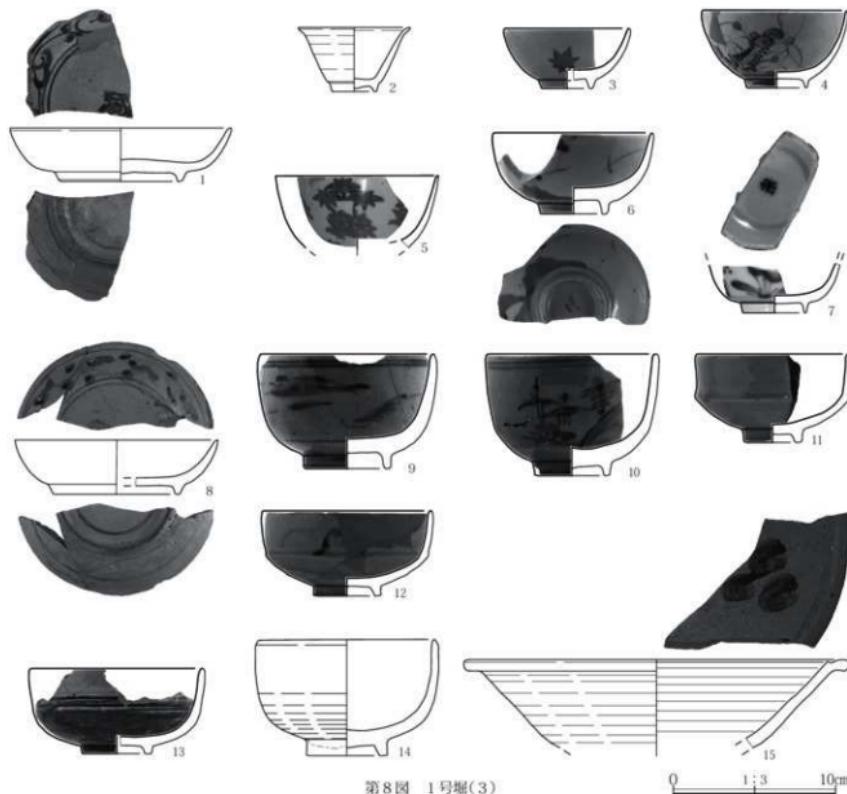
第6図 1号堰(1)

Δ , L=146.60m Δ , L=146.00m Δ' Δ , L=145.50m Δ' Δ , L=145.80m Δ'

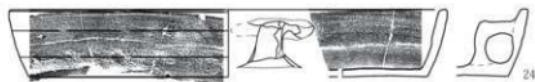
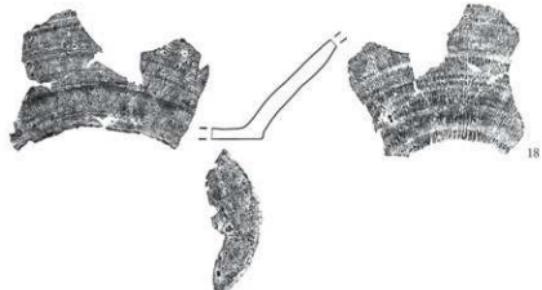
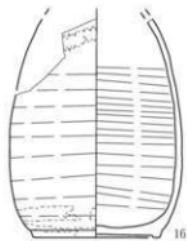
第7図 1号堀(2)

0 1:60 2m

- 1号掘土層
- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 表土。軟質の蘿葉土。植物根が多く見る
 - 2 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 軟質土。ローム塊・炭化物を含む
 - 3 黒褐色土(7.5YR3/1) 軟質土。炭化物、ローム粒、灰を含む
 - 4 黑褐色土(7.5YR3/2) 軟質土。植物根を見る。炭化物、ローム粒を含む
 - 5 暗褐色土(7.5YR3/4) 白色粒、褐色粒、僅かなローム粒を含む
 - 6 暗褐色土(7.5YR3/4) 白色粒、褐色粒、ローム塊を含む
 - 7 黑褐色土(7.5YR3/1) 炭化物、ローム粒、灰、鐵を含む。磁器を出土する
 - 8 黑褐色土(7.5YR3/1) 白色粒、褐色粒を多く含む。ローム粒、炭化物を少量含む
 - 9 褐色土(7.5YR4/4) ローム塊を多く、炭化物を少量含む
 - 10 黑褐色土(7.5YR3/1) 白色粒、褐色粒、ローム粒、炭化物を含む
 - 11 褐色土(7.5YR4/4) ローム小塊、炭化物を含む
 - 12 黑褐色土(7.5YR2/1) 黄褐色粒、鐵、輕石を含む
 - 13 褐色土(7.5YR4/3) ローム塊を多く含む。白色粒、炭化物を少量含む
 - 14 褐色土(7.5YR4/3) ローム小塊、黑色土壤を含む
 - 15 明黃褐色土(10YR6/8) 砂質土を主体とする。水性堆積
 - 16 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強く褐色粒を少量含む。水性堆積
 - 17 にぶい褐色土(10YR4/3) 砂質土を主体とする。ローム小塊多く含む。水性堆積
 - 18 黄褐色土(10YR7/8) ローム塊を多く、炭化物を微量含む
 - 19 黄褐色土(10YR8/6) 黄褐色塊・ローム塊を多く含む
 - 20 黑褐色土(7.5YR3/1) 白色粒、褐色粒を少量含む。盛り土か
 - 21 黑褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多く。白色粒、褐色粒を少量含む。盛り土か

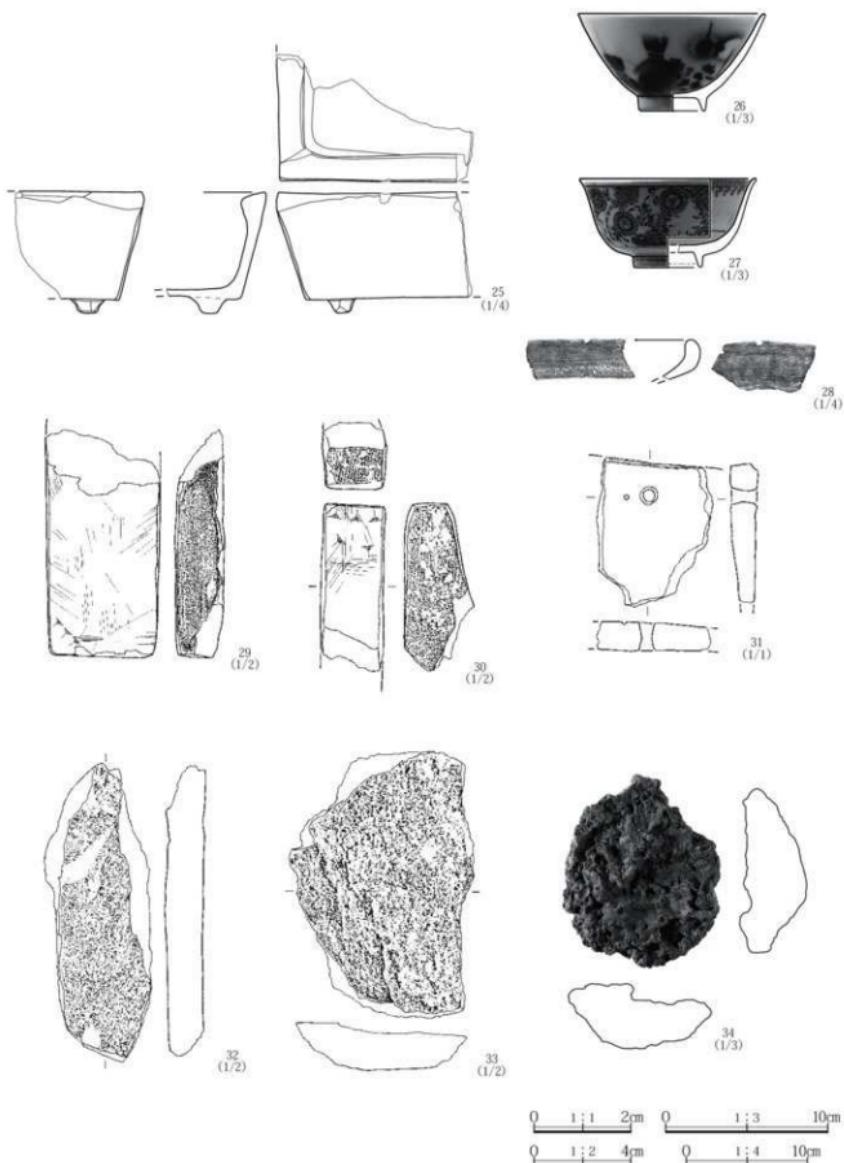


第8図 1号掘(3)



第9図 1号堀(4)

0 1:4 10cm



第10図 1号堀(5)

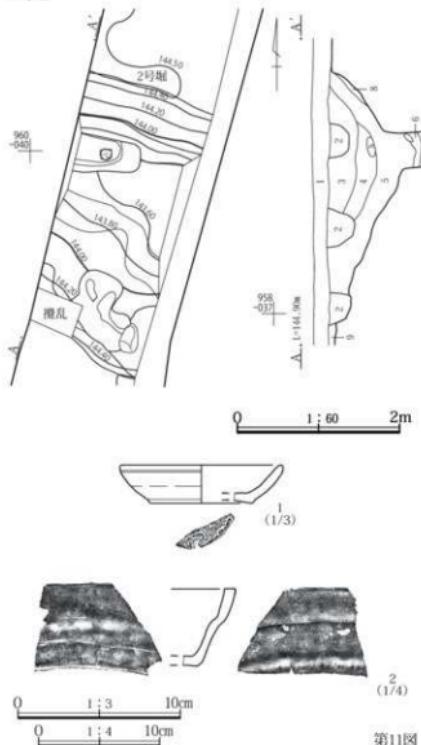
平坦地形が広がり、調査区域外も西への傾斜が僅かに観察できる地点である。

経過：ローム層上面で調査された。埋土との色調差は明瞭で、軟質なため、壁や底面の検出も容易だった。硬質ロームを掘り抜き良好な壁、底面を示していた。また、平成28年度に調査された、前畠J遺跡3区1号溝と東側で一致する。同一の遺構である。

規模：幅約3.6m、深さ約1.2mを測る。1号堀と比較すると小規模だが、前畠J遺跡1号溝の走行と併せると、東西方向の直線的な走行を示し、堀底面も一部葉研状を呈する。

重複：西側壁の土層上層に浅い落ち込みが約1mの間隔で3箇所確認された。2号堀南側には東西に走行を示す現代攪乱溝一耕作溝が4条確認されており、本土層で確認された浅い落ち込みもこの耕作溝の延長と位置付

2号罐



けられ、現代耕作畑と判断した。

遺物：薬研堀状の底面近くより板片（第11図3）が出土している。東に延長する前烟口跡遺構3区1号溝では、中世～近世の陶器類とともに板片が出土している。別個体の破片ではあるが、今回の調査で出土した板片と併せて、時期を推定する良好な出土資料である。その他には在土地器2点を図示した（第11図1・2）。中世末期から近世に比定されよう。

所見：同一遺構である前畠J遺跡3区1号溝と併せて、東西の直線的な走行を示す壠である。出土遺物として底面近くより板碑片を見た事から、帰属時期は中世～近世に求めておきたい。性格については調査範囲が狭く、詳細は不明である。直線的な走行、薬研状の底面形態から中世館の廻剤なども想定できよう。

2号職上層

- 1 灰褐色土(7.5YR4/2) 表上及び耕作土
 - 2 暗褐色土(7.5YR3/4) 現代耕作痕
 - 3 にぶい褐色土(7.5YR5/4) ローム塊。褐色粒、白色粒を微量含む
 - 4 黑褐色土(7.5YR3/2) 黑褐色土塊を多く、中型礫を含む
 - 5 暗褐色土(7.5W3/4) ローム塊、炭化物を微量含む
 - 6 明褐色土(7.5W5/8) 硬質でまり強い。ローム塊多く含む
 - 7 黑褐色土(7.5W3/2) 小礫多く含む。板片の出土を見る
 - 8 明褐色土(7.5W5/8) 肥沃。ローム粒を多く含む
 - 9 明褐色土(7.5W5/8) ローム埋土体。基盤層



第11図 2号墳

第3節 土坑

1号土坑(第12図 PL. 4)

位置：調査区北端の1区で調査された。飛び地の様な形態の狭小な調査区で、西側を調査区域外に延長する形態で検出された。座標位置はX=030～032-Y=-037である。周辺地形は西側への緩傾斜地形が広がるがほぼ平坦面である。

経過：調査当初に着手された土坑である。平面形はローム漸移層で確認され、埋土は黒褐色土のため容易に識別できた。底面、壁の検出も良好に果たせた。

規模：西側に未調査部分を延ばすため、全容は把握できないが、長軸長約1.7mのやや大型の土坑と思われる。深さは約10cmを測り浅く皿状の断面形を示す。

重複：1号ピットが底面で重なるが、新旧関係は不明である。

遺物：埋土中より縄文土器片や石器剥片が出土したが、土器片は無文の細片で、図化には至らなかった。時期は堀之内1式に相当する。

所見：おそらくやや大型の不整円形を呈する浅い土坑である。出土土器に縄文土器片を見たが、図示には至らなかった。時期は出土土器から縄文時代の可能性があるが、細片であり判断を控えたい。性格は不明である。

2号土坑(第12図 PL. 4)

位置：1区中央部分で確認された。周辺はほぼ平坦地形が広がり、単独の検出となった。座標位置はX=004・005 Y=-026である。

経過：調査前半段階に着手された。軟質ローム上層で平面形を確認した。埋土は黒褐色土で識別は容易だった。

規模：平面形は不整円形を呈し、規模径約55cmの小型のピット状土坑である。深さは約20cmで鍋底状の断面形を示す。

重複・遺物：重複遺構は無く単独の検出である。出土遺物も見られなかった。

所見：小型の不整円形を呈するピット状土坑で、時期、性格とも不明である。周辺遺構に4号・5号土坑が西に近接するが関係性を窺うことはできない。

3号土坑(第12図 PL. 4)

位置：1区中央の西壁にかかり検出された。周辺は平坦

地形が広がり、南側には6～8号土坑や14号土坑が近接する箇所である。座標位置はX=997～999 Y=-028～-030である。

経過：軟質ローム上層で平面形を確認した。埋土はローム塊を含む暗褐色土のため、平面形や底面、壁の識別は容易だった。

規模：西側と南西隅を調査区域外に延ばすが、平面形は長軸を北北東に向けた不整長方形を呈する。規模は約2.3×1.6mを測る大型土坑で深さも約70cmで硬質ローム下位にまで達す。底面は僅かな凹凸を見るがほぼ平坦面を築き、壁は直立気味に良好に立ち上がる。箱型の断面形を示す。

重複：重複遺構は無いが、南に14号土坑や6～8号土坑が近接する。6～8号土坑は不整長方形を呈し箱型の断面形の共通性を持つため、本土坑との関連性が窺われるよう。

遺物：在地系土器皿(第12図1)が土坑北東隅埋土上層より出土している。土坑用途を示唆する例では無いが、時期を具体化する資料である。他に土師器杯片や縄文中期土器片が出土しているが流入の所産である。

所見：時期は出土土器から中世以降の所産と判断した。性格は土坑形状から、ムロなどの貯蔵施設あるいは墓壙が想定され南側に群在する6～8号土坑や4号土坑との関係が検討課題になろう。

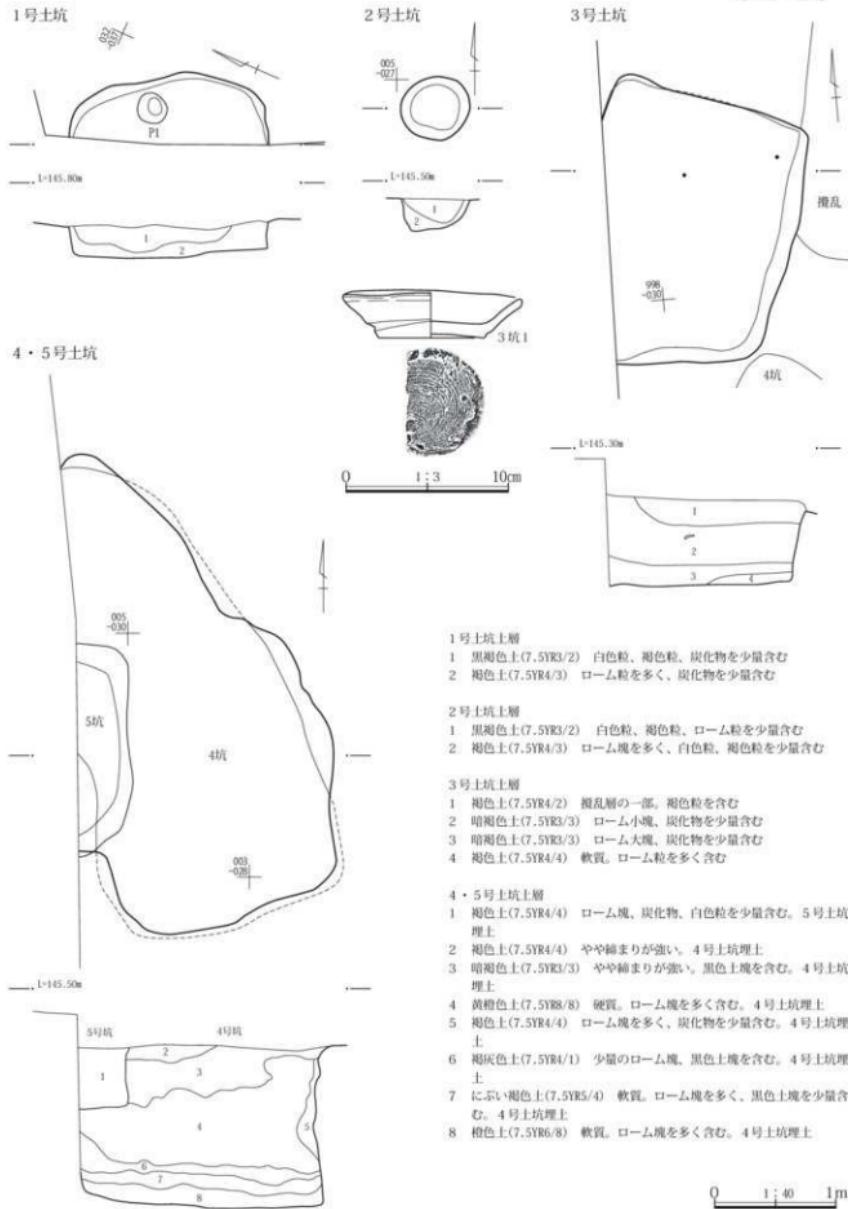
4号土坑(第12図 PL. 4)

位置：1区中央の西壁にかかり調査された。周辺は南西への緩斜面地形にあるが、ほぼ平坦面が広がる地点である。座標位置はX=002～006-Y=-026～-030である。

経過：調査後半段階に軟質ローム面で平面形を確認した。土層観察を平行し重複土坑が抽出されたため、重複土坑を5号土坑とした。5号土坑の掘り込みは本土坑上層に止まるため、本土坑に先行して記録化した。埋土はローム塊を多量に含みやや軟質のため底面、壁の検出は容易だったが大型で深い土坑のため、調査終盤まで記録化が続いた。

規模：大型で深い。平面規模は推定4.0×2.2mの長軸方位を北西に向けた大型の不整長方形を呈し、深さは約1.4mを測る。硬質ロームを掘り抜き、底面はほぼ平坦面を築く。壁はオーバーハング気味に直立する良好な掘り込みで箱型の断面形を呈す。

第3節 土坑



第12図 1～5号土坑

第2章 発見された遺構と遺物

重複：西側の調査区壁で5号土坑と重なる。土層の観察で5号土坑が新しい。

遺物：土師器、繩文土器が数点出土したが、土坑時期や性格を示唆する出土状態ではない。人骨等の墓を想定する遺物は出土していない。

所見：大型の長方形土坑で、埋土に大型のローム塊を見るところから、調査所見では「穴蔵」の天井部崩落を示唆している。出土遺物を見ないため、詳細な時期・性格は判断できないが、おそらく3号土坑などとの共通性から中世以降の所産で、貯蔵施設としてのムロあるいは地下式坑と考えておきたい。

5号土坑(第12図 PL. 4)

位置：先に述べた4号土坑と重複して調査された。座標位置はX=003・004-Y=026～030である。

経過：4号土坑を切る新旧関係である。そのため4号土坑に先行して調査し、平面形の抽出に努め、断面形は土層により判断した。4号土坑との重複部分から外れた箇所で壁や底面の検出が果たせた。

規模：大きく西側の調査区域外へ延長するため全容は把握できないが、おそらく平面形は長方形が推定される。長軸規模は約1.7mで深さは約55cmを測る。断面形状は箱形を呈す。

重複：4号土坑を切る。

遺物：在地土器破片や染付片が出土する。土師器杯片や繩文土器片も見るが土坑に伴う所産ではない。

所見：長方形土坑を推定する。おそらく3号土坑などと同様にムロなどの貯蔵施設や墓壙としての性格が想起されよう。時期は出土遺物から中世以降の所産と考えた。

6号土坑(第13図 PL. 4)

位置：1区中央の調査区西壁にかかり調査された。3号土坑南で7・8号土坑、14号土坑と重複していた。周辺は平坦地形が広がる地点で座標位置はX=995～997-Y=028～030である。

経過：調査中盤で7・8号土坑と同時に調査された。遺構確認面は軟質ローム上面である。重複土坑であるが、土層により新旧を判断し、3基を同時に調査した。

規模：西側を調査区域外に延ばすため全容は把握できないが、主軸を西北西に向けた長方形を推定平面形とし、短軸長約1.4m、深さ約50cmを測る。底面は僅かに西側に傾斜するもののほぼ平坦面を築き、ほぼ直立気味に壁

が立ち上がる。箱形の断面形といえよう。

重複：7号土坑、8号土坑、14号土坑が重なる。7号土坑との新旧は土層の観察で本土坑を新しく位置付けている。また当初は7号土坑単体の重複と考え8号土坑との土層観察を行っていない。しかし西壁土層に8号土坑の土層が観察されなかったため、6号土坑が8号土坑を切ると判断した。14号土坑との重複関係に関しては土層による新旧判断ができなかつたため不明である。

遺物：染付小丸椀、在地土器、焰烙片(第13図6坑1～3)を出土する。いずれも破片の出土であり本土坑の性格を示唆する例ではない。他に繩文土器数点を見るが混入である。人骨の出土は見ない。

所見：調査区中央南側で集まる長方形土坑群の一つである。3号土坑でも述べたが、時期は近世以降に比定し、性格は貯蔵穴あるいは墓壙としたい。

7号土坑(第13図 PL. 4)

位置：6号土坑東に重複した状態で調査された。座標位置はX=995・996-Y=028である。

経過：新旧は土層観察により6号土坑を新しく位置付け6号土坑と同時に調査した。埋土は6号土坑と同様の褐色土であるが、6号土坑埋土はローム粒の含有量が多く新旧の識別の判断材料となった。

規模：西側は6号土坑との重複のため全容は把握できない。おそらく長軸を東西に設ける長方形土坑と判断できる。南北軸長約1.3m、深さ約50cmを測る。6号土坑との深さの差は少なく段差は無い。土坑底面はほぼ平坦で、壁もしっかりと掘り込まれ直立気味で箱形の断面形を呈していた。

重複：6号土坑に切られるが南に接する8号土坑や北側の14号土坑との新旧は不明である。

遺物：須恵器片が1点出土するが、本土坑に伴う例では無い。

所見：周辺に群在する3号土坑や6号土坑と同様に、時期を中世以降に求め、性格は貯蔵穴あるいは墓壙として推定したい。6号土坑とおそらく主軸や規模が近似すると思われ、両者の近縁性が窺われる。

8号土坑(第13図 PL. 4・5)

位置：6・7号土坑南で重複した状態で調査された。座標位置はX=994・995-Y=029・030である。

経過：調査着手時は6号土坑と同一と判断されたが、精

査を重ね、底面において6cm程の段差が確認されたため、別土坑として位置付けられた。そのため、土層の記録は果たせず断面形の図示に止まっている。

規模：北側を6号土坑と重複するため詳細は不明である。おそらく、長方形を平面形とする6・7号土坑と同様の土坑と考えられよう。東西軸長約1.5m、深さ約40cmを測る。底面は平坦で箱形の断面形を示していた。

重複：6・7号土坑と重なるが新旧は不明である。

遺物：出土遺物を見ない。

所見：重複する6・7号土坑と同様の時期・性格が想定されよう。中世以降に時期を求める、貯蔵穴あるいは墓壙としての性格を想定しておきたい。

9号土坑(第13図 PL. 5)

位置：調査区中央南西側に位置する。周辺はほぼ平坦地形が広がり、巨視的には調査区域外に緩傾斜する様相を示す。座標位置はX=991・992-Y=-030・-031である。経過：調査中盤にローム漸移層で平面形を確認した。埋土は締まりの弱い褐色土で、底面、壁の検出は容易だった。

規模：平面形は北東に長軸を持つ不整梢円形を呈す。平面規模は約1.3×0.8mで深さは約20cmを測り、浅く皿状の断面形を示す。

重複：接する遺構も無く、単独の検出である。

遺物：埋土中より須恵器片1点、繩文中期土器片1点を見たがいずれも本土坑に伴う例では無い。

所見：不整梢円形を呈し皿状の断面形で浅く、有機的な遺物の出土も見られなかったため、土坑の時期、性格は判断できなかった。

10号土坑(第13図 PL. 5)

位置：1区南側の調査区西壁にかかり調査された。周辺は南西への緩斜面地形が広がる地点で、南側には11号土坑や12号土坑が近接する。座標位置はX=983・984-Y=-032・-033である。

経過：調査中盤に調査された。軟質ローム上層で平面形を確認し、褐色軟質土の埋土をもって壁と底面を検出した。土層は調査区西壁を利用した。

規模：西側を調査区域外に延びたため全容は判然としない。おそらく不整円形を推定平面形とする土坑である。平面規模は南北軸長約1.5m、深さ31cmを測る。底面は平坦で良好な掘り込みを呈し箱形の断面形を示す。

重複・遺物：単独の検出で出土遺物も見られなかった。所見：出土遺物も無く、時期、性格は特定できない。埋土の特徴から、中世以降の所産と判断するが、軟質土であり近世以降の可能性が高い。

11号土坑(第13図 PL. 5)

位置：10号土坑と12号土坑に挟まれた地点で、西側を調査区域外に延びた形状で調査された。周辺は西への緩斜面地形で、座標位置はX=981・982-Y=-033である。

経過：調査中盤にローム漸移層で平面形を確認した。埋土は明褐色を呈するがローム小塊、礫を含む軟質土のため底面や壁の検出は容易だった。

規模：径1m前後の推定不整円形を平面形とする。深さは30cmを測り掘り込みも良好である。また調査所見では南側壁際の一部に桶痕跡を見るとされているが、残存状態は悪く全容は把握出来なかった。

重複：重複構造ではなく単独の検出である。南側に12号土坑が近接するが、形状等に共通性が無く関係性は弱い。

遺物：埋土中より近世に比定される鍛鉄破片や焰絡片などが出土した(第13図11坑1・2)。その他に繩文土器破片を見るが流入と判断した。また底面よりやや浮いて中型の礫が出土する。用途は不明だが出土層位から土坑性格に伴う例と判断できる。

所見：人骨の出土を見ないが、桶の痕跡、中型礫の出土から座柄を伴う墓壙の可能性もある。時期は出土遺物から近世以降の所産と考えた。

12号土坑(第13図 PL. 5)

位置：1区南側で調査区西壁にかかり検出された。11号土坑の南に近接する。周辺は西側への緩傾斜が認められる物のほぼ平坦面が広がる。座標位置はX=980・981-Y=-032～-034である。

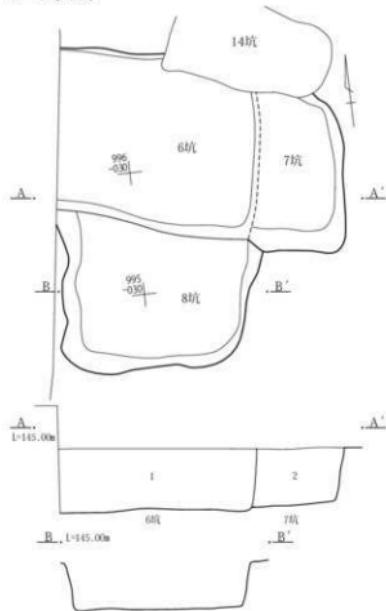
経過：調査中盤にローム漸移層で平面形を確認した。埋土は明褐色ながら軟質でローム塊を多く含むため底面や壁の検出は容易だった。

規模：西北西に長軸を持つ縱長方形を平面形とするが、西側が調査区域外に延びるため長軸方向の全容は判然としない。短軸幅である南北長は約1mで深さは約20cmを測る。底面は平坦で壁も直立した箱形の断面形を示す。

重複：単独の検出である。北側に11号土坑が近接するが形態などに大きな差が見られ関係性は極めて薄い。

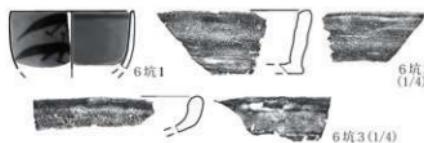
遺物：須恵器片が少量出土するが本土坑に伴う例では無

6~8号土坑



6・7号土坑上層

- 1 褐色土(7.5YR4/4) ローム塊、炭化物を少量含む。6号土坑埋土
- 2 褐色土(7.5YR4/4) ローム塊、炭化物、白色粒を含む。7号土坑埋土



11・12号土坑上層

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 表土
- 2 褐色土(7.5YR4/4) ローム小塊・炭化物を含む
- 3 明褐色土(7.5YR8/5) ローム小塊多く含む。疊合土。11号土坑埋土
南側底壁際に桶廢しきもの有
- 4 明褐色土(7.5YR8/5) ローム小塊多く含む。12号土坑埋土



0 1:3 10cm

0 1:4 10cm

20

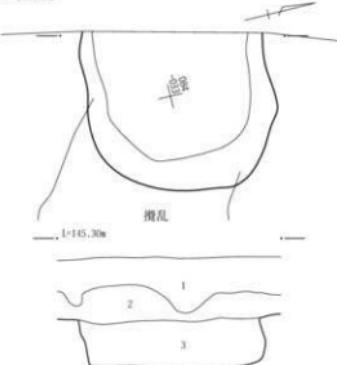
9号土坑



9号土坑上層

- 1 褐色土(7.5YR4/4) ローム塊、炭化物を少量含む

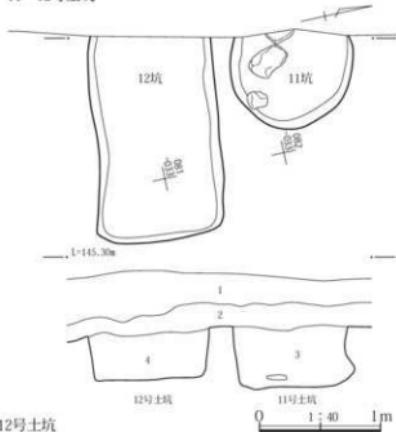
10号土坑



10号土坑上層

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 表土
- 2 褐色土(7.5YR4/4) ローム小塊、炭化物を少量含む
- 3 明褐色土(7.5YR8/5) しまり弱い。ローム塊を多く含む

11・12号土坑



第13図 6~12号土坑

く流入と判断した。

所見：埋土の様相から11号土坑と同様に近世以降の所産と考えたが、あるいは近世以降と考えられよう。平面形はムロ状であり貯蔵施設としての可能性が高い。

13号土坑(第14図 PL. 5)

位置：1区南端で調査された。12号土坑南に近接し、周辺は西側への緩傾斜地形が広がるがほぼ平坦地形に位置する。座標位置はX=979-Y=032～033である。

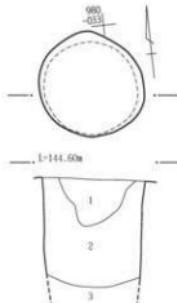
経過：調査中盤においてローム漸移層で平面形が確認された。埋土はローム塊を含む褐色土で色調差も明瞭のため検出は容易だった。ただ本土坑は素掘りの井戸と思われ、調査深度が2m以上となることが予想された。平面形も小型で、壁も直立しており底面の検出は安全上不可能だった。故に調査は底面にまでは至らなかった。

規模：径約90cmの小型の円形を呈す。前述のように底面までの検出には至らなかったが、壁が直立した筒形の断面形が推定された。

重複：重複遺構はなく単独の検出である。

遺物：遺物の主体的な出土は見られず、少量の土器破片と繩文土器片が見られた。いずれも本土坑に伴う例では無く流入と判断した。

13号土坑



13号土坑上層

- 1 褐色土(7.5YR4/4) ローム小塊・炭化物を少量含む
 - 2 褐色土(7.5YR4/4) しまり弱い、ローム大塊を多く含む
 - 3 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム小塊を多く含む
- 底面までの検出は果たせなかった。平面形状から井戸と考えられる。



所見：小型の素掘りの井戸である。時期は、埋土の共通性から11号土坑と同様に近世以降に求めたい。

14号土坑(第14図 PL. 5)

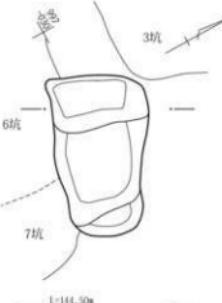
位置：1区中央の調査区西壁にかかり調査された。3号土坑南に近接し7・8号土坑と重複していた。周辺は平坦地形が広がる地点で座標位置はX=996・997-Y=-028・-029である。

経過：調査終盤において軟質ローム面での検出となった。重複する6・7号土坑調査後の確認である。埋土は褐色土ながら既に6・7号土坑調査時に存在は確認されていて、平面形、底面、壁の検出は容易に果たせた。

規模：西北西に長軸を設けた不整方形を平面形とする。平面規模は約1.3×0.8mで深さは最深部で約70cmを測る。底面の形状に特徴があり、西側から東へ3段差を持って上がる。比高差は各段差が約17cmあり意図的な段差と判断できる。6号土坑への昇降施設としての機能を想定したが、最深部は6号土坑底面より低く昇降施設としては妥当ではない。

重複：6・7号土坑と南側で重複するが、新旧関係は不明である。

遺物：繩文土器及び石器剥片が10数点出土したが、本土14号土坑



14号土坑上層

- 1 褐色土(7.5YR4/4) ローム小塊を多く含む
- 2 黒褐色土(7.5YR3/1) しまり弱い、ローム塊を少量含む
- 3 棕色土(7.5YR6/6) 軟質ローム塊を主とする
- 4 黄褐色土(7.5YR7/8) しまり強い、ローム塊を含む
- 5 にふい褐色土(7.5YR5/3) ローム小塊、黒色土塊を含む
- 6 褐色土(7.5YR4/3) 軟質、ローム塊を多く含む

第14図 13・14号土坑

坑に伴う例ではなく、流れ込みと判断した。

所見：周辺の近接する土坑と近似の時期と性格と考えた。中世以降の所産で貯蔵などの性格が想定されよう。底面の段差は周辺土坑との関連もあり検討を要する。

第4節 ピット

1号ピット(第15図 PL. 6)

位置：調査区北側の1区北端の1号土坑底面に位置する。

座標位置はX=033-Y=-037である。

経過：1号土坑底面で平面形が確認され、1号土坑調査後に着手された。黒褐色土を主な埋土とするため検出作業は容易だった。

規模：平面形は不整円形を呈し、規模は径約25cm、深さ約37cmを測る。底面は軟質ローム中に止まり、壁の立ち上がりは直立気味である。

重複：1号土坑と重なるが新旧は不明である。

遺物：出土遺物は無い

所見：詳細な時期、性格は不明である。埋土の様相から中世以降の所産と考えられる。

2号ピット(第15図 PL. 6)

位置：1区北側の1号堀北に近接した位置にある。座標位置はX=021-Y=-033である。

経過：1号堀と同時に調査された。ローム漸移層で検出したため埋土の黒褐色軟質土との識別は容易だった。規模：径約30cm、深さ約50cmを測る不整円形のピットである。掘り込みは良好で直立気味の立ち上がりを示す。

重複・遺物：単独の検出である。近接する1号堀との関係性は不明である。出土遺物は見ない。

所見：詳細な時期、性格は不明であるが、1号堀との近接状態から、堀に沿う柵列の柱穴の可能性はある。埋土の様相から中世以降の所産と考えられる。

3号ピット(第15図 PL. 6)

位置：調査区南側の2区で調査された。2区中央部やや北寄りに位置する。座標位置はX=963・964-Y=-038である。

経過：調査中盤で着手された。軟質ロームで平面形を確認し、暗褐色を呈する埋土との識別は容易だった。

規模：平面形は不整円形を呈し、規模は径約30cm、深さ約15cmを測る。浅く掘り込みも弱い印象を受ける。

重複・遺物：単独の検出である。4号ピットが北に近接

する。出土遺物は見られなかった。

所見：詳細な時期、性格は不明である。4号ピットが北に近接するが、掘立柱建物を構成する在り方では無い。埋土の様相からは近世以降に求められよう。

4号ピット(第15図 PL. 6)

位置：調査区南側の2区で調査された。2区中央部やや北寄りの調査区西壁にかかる位置である。座標位置はX=964・965-Y=-038である。

経過：調査中盤で着手された。平面形の確認は軟質ローム上層でを行い、暗褐色軟質土を埋土とするため検出は容易だった。

規模：西側を調査区域外に延ばすため全容は不明である。推定平面形を径約40cmの不整円形を呈す。深さは10cm未満で皿状の断面形を示し極めて浅い。

重複：単独の検出で、出土遺物は見られなかった。

所見：詳細な時期、性格は不明である。3号ピットが南に近接するが、掘立柱建物を構成する在り方では無い。平面形の在り方から人為的な所産とは思われず、埋土の様相からは近世以降に求められよう。

5号ピット(第15図 PL. 6)

位置：1区南東端に位置する。周辺地形は北西への緩斜面を呈すがほぼ平坦面が広がる。座標位置はX=977・978-Y=-029である。

経過：調査中盤に着手され、ローム漸移層で平面形を確認した。埋土は灰褐色で底面、壁の検出は容易だった。

規模：径約50×46cmの不整円形を平面形とし、深さは約40cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、掘り込みもやや弱い印象を受ける。

重複・遺物：単独の検出である。北に6・7号ピットが近接する。出土遺物は見られなかった。

所見：平面規模は良好なピットだが、出土遺物も見られないといため、詳細な時期、性格は不明としたい。埋土の様相からは中世以降に時期が求められよう。

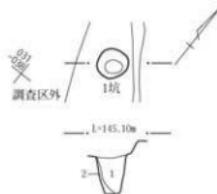
6号ピット(第15図 PL. 6)

位置：1区南東端に位置する。周辺地形は北北東への緩斜面だが、ほぼ平坦面が広がるといえよう。座標位置はX=978・979-Y=-028である。

経過：調査中盤に着手され、ローム漸移層で平面形を確認した。7号ピットと重複した状態で同時に調査した。埋土は灰褐色を呈し底面、壁の検出は容易だった。

第4節 ピット

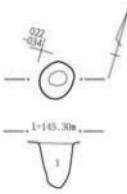
1号ピット



1号ピット上層

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 軟質。白色粒、褐色粒、炭化物を少量含む
- 2 褐色土(7.5YR4/3) 軟質。ローム塊を多く含む白色粒、褐色粒、炭化物を少量含む

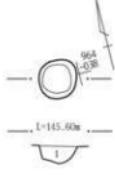
2号ピット



2号ピット上層

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 軟質。白色粒、褐色粒、炭化物を含む

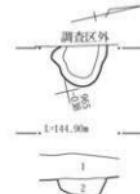
3号ピット



3号ピット上層

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム小塊が多く含む

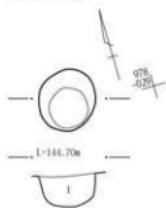
4号ピット



4号ピット上層

- 1 灰褐色土(7.5YR5/2) 表土、耕作土
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム小塊を含む

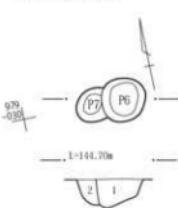
5号ピット



5号ピット上層

- 1 灰褐色土(7.5YR4/2) ローム塊を多く、炭化物を少量含む

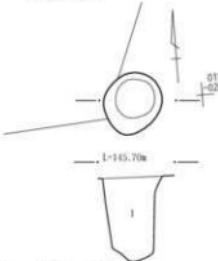
6・7号ピット



6・7号ピット上層

- 1 灰褐色土(7.5YR4/2) ローム粒、少量の炭化物を含む。6号ピット埋土
- 2 灰褐色土(7.5YR4/2) しりょう弱い。ローム小塊を多く含む。7号ピット埋土

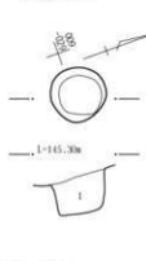
8号ピット



8号ピット上層

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒、炭化物を少量含む

9号ピット



9号ピット上層

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム塊、炭化物を少量含む

第15図 1～9号ピット

規模：径約36cmの小型円形を平面形とする。深さは約

22cmを測り浅く断面形状も皿状を示す。

重複：西側で7号ピットと重複する。新旧関係は本ピットが新しい土層観察を得ている。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：浅いピットで詳細な時期、性格は特定できない。

5号ピットが南に近接するが、掘立柱建物などを構成する様相ではない。埋土の様相からは中世以降の所産したい。

7号ピット(第15図 PL. 6)

位置：1区南東端で6号ピットと重複した位置にある。

座標位置はX=978・979-Y=-029である。

経過：調査中盤に着手され、6号ピットと重複した状態で同時に調査した。

規模：径約25cmの小型不整円形を平面形とする。深さは20cm程度で浅い。断面形状も6号ピットと同様で皿状を

示す。

重複：6号ピットに切られる重複関係である。

遺物：出土遺物は見られなかった。

所見：6号ピットと同様に浅いピットで詳細な時期、性格は特定できないが、埋土の様相からは中世以降の所産としたい。

8号ピット(第15図 PL. 6)

位置：1区北側の1号堀南側に位置する。周辺は南西への緩傾斜地形が広がり、北東には1号堀南端が迫る。座標位置はX=010・011-Y=-028である。

経過：調査終盤に着手された。漸移層で平面形が確認された。埋土は暗褐色土で明瞭な色調差のためピットの検出は容易だった。

規模：平面形は径56×48cmの不整円形を呈し、深さは80cmを測り深い。良好な掘り込みで筒状の断面形を示す。

重複：単独の検出である。

遺物：縄文土器片を1点出土したが、本ピットに伴う例かは確定性に乏しい。ここでは流入と判断した。

所見：残存度の良好なピットで明らかに人為的な所産である。縄文土器片を出土するが、1点のみの出土であり時期、性格は判断を控えたい。

9号ピット(第15図 PL. 6)

位置：I区北側の1号堀南側に位置する。周辺は南西への緩傾斜地形が広がり、南側は攤乱坑が接する。座標位置はX=008・009-Y=028である。

経過：調査終盤に着手された。平面形の確認はローム漸移層で行われた。暗褐色を呈する埋土との色調差は明瞭のため、検出は容易だった。

規模：平面形は不整円形を呈し、平面規模は約50×45cmで深さは約40cmを測る。比較的しっかりした掘り込みで箱形の断面形を示す。

重複：重複遺構はなく単独の検出である。

遺物：埋土より縄文中期土器片2点が出土しているが、本ピットに伴う例では無い。

所見：詳細な時期、性格は不明だが、掘り込みも良好で人為的なピットであろう。縄文土器片を出土するが8号ピットとの関連性も弱く、縄文時代の所産とはできない。

第5節 遺構外出土遺物

前節で述べたように、検出された遺構の殆どが中世以降の所産と位置付けられる。各遺構より出土した遺物の多くが中世～近世遺物以外は遺構外出土遺物となる。おそらく周辺の縄文時代集落や古墳時代～古代集落からの流入により、本遺跡の遺構に混在したものであろう。

ここでは、試掘トレンチなどから出土した縄文時代～古代の遺物さらに中世～近世遺物を掲載して、本遺跡の全体像をしたい。

縄文時代

前期後葉～後期中葉の土器片が多量に出土している。総破片点数は1,400点で後期前葉の破片資料が多かった。第16～19図1～5は諸磯a式とb式、2は小破片だが小型の連続爪形文を口縁部に施し、内面は丁寧に研磨する例で2点を同一個体と考えた。6～13は中期前葉～中葉末に比定した。6は七郎内Ⅱ群土器であろうか。7は勝坂2式、8・9は勝坂3式、10・11は阿玉台1b式、12は加曾利E1式段階の浅鉢、13は深鉢である。14～31に

中期後葉の土器片を集めた。14～21は加曾利E II式、22～31が加曾利E III式である。加曾利E II式は古段階に位置付けられよう。中期末葉の資料として32を加曾利E IV式深鉢体部破片として位置付けた。

33～38を後期初頭として、33～35を称名寺I式、36～38を称名寺II式とした。あるいは同一個体か。39～56は後期前葉の土器片である。39～54を堀之内1式と位置付けた。出土量は多く、おそらく遺跡周辺に敷石住居などを伴う集落の存在が予想されよう。41～45は大型深鉢で同一個体の可能性が高い。50・54は注口土器と思われる。55は新潟県域の三十稻場式と考えたが、刺突方法などから在地の様相が強い。56・57は堀之内2式である。58～62は加曾利B2式として位置付けられよう。いわゆる遠部タイプであろう。

石器の出土量は土器に比して少ない。62点が出土し12点を図示した(第19・20図)。定形石器では磨石が最も多く8点で、次いで打製石斧6点を数えた。打製石斧は3点を図示した(63～65)。石材はホルンフェルス製にやや偏りが見られた。乳棒状の磨製石斧(66)もホルンフェルス製である。磨石・凹石は6点を掲載したが全て粗粒安山岩製である(67～72)。石皿(74)は脚付石皿破片で粗粒安山岩製、73は低石で砂岩製である。

古墳時代～古代

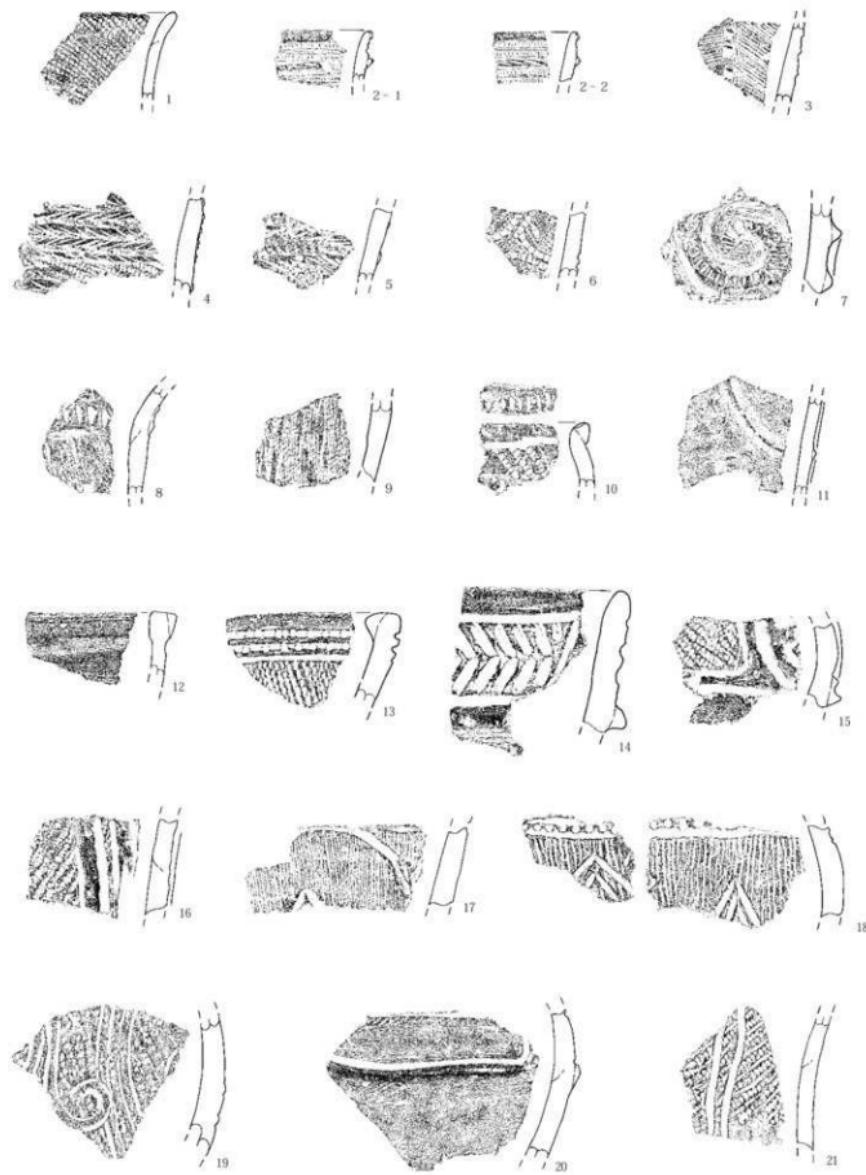
出土量は多く無く、1号堀や3号土坑等、各トレンチからの出土である。このため遺構に伴う例とは判断せず全て遺構外出土として位置付けた。

古墳時代の土器としては、75～92を充てたい。前期に比定されるS字状口縁甕は75～78、咲口縁部(79)は古墳中期の所産であろうか。80～86は古墳時代後期6世紀代に比定されよう。ミニチュア土器がまとまる(87～92)。出土地点にまとまりが無く、原位置が推定出来ないが、周辺に古墳あるいは祭祀関連遺構の存在が想定されよう。

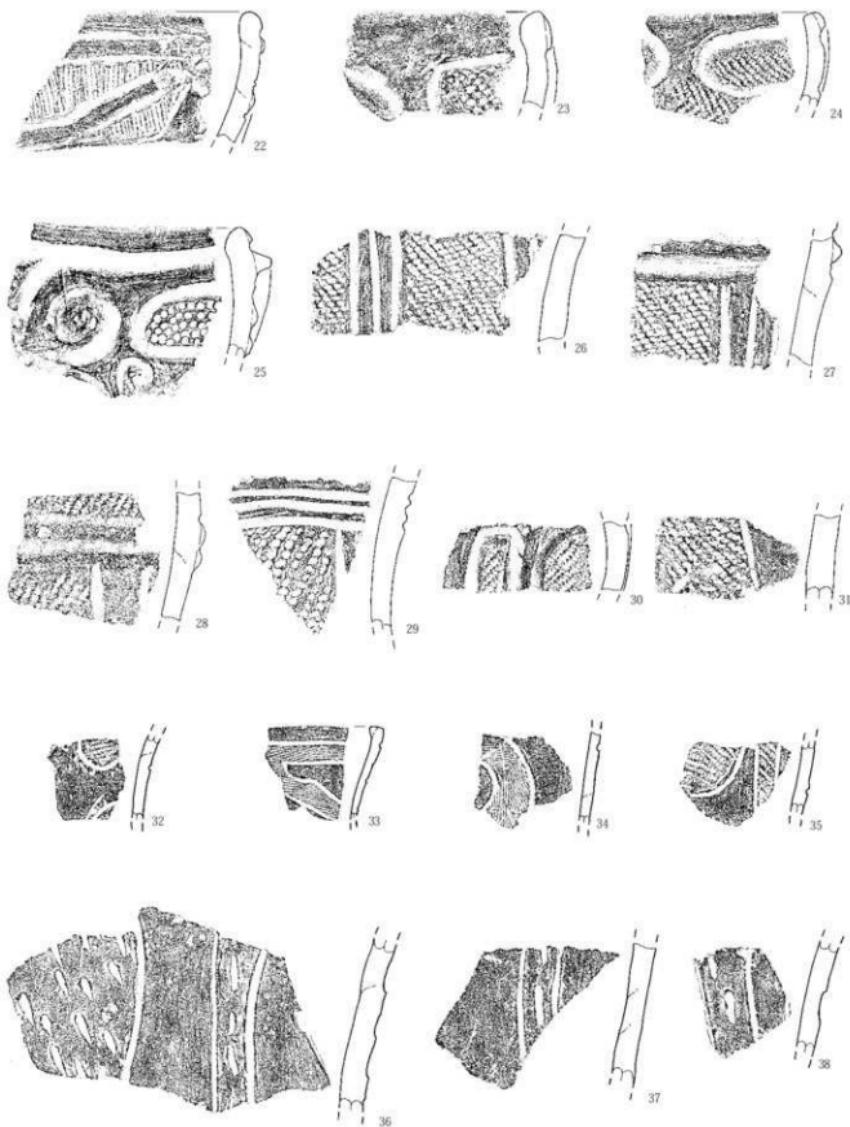
古代の土器として93の大甕体部破片と須恵器杯底部(94)をした。

中世以降

本遺跡の検出遺構の多くが中世～近世に属する。出土遺物の多くは遺構に伴出する例として各遺構図に併載したが、トレンチ出土や表土出土とされる数点を遺構外出土遺物として図示した。

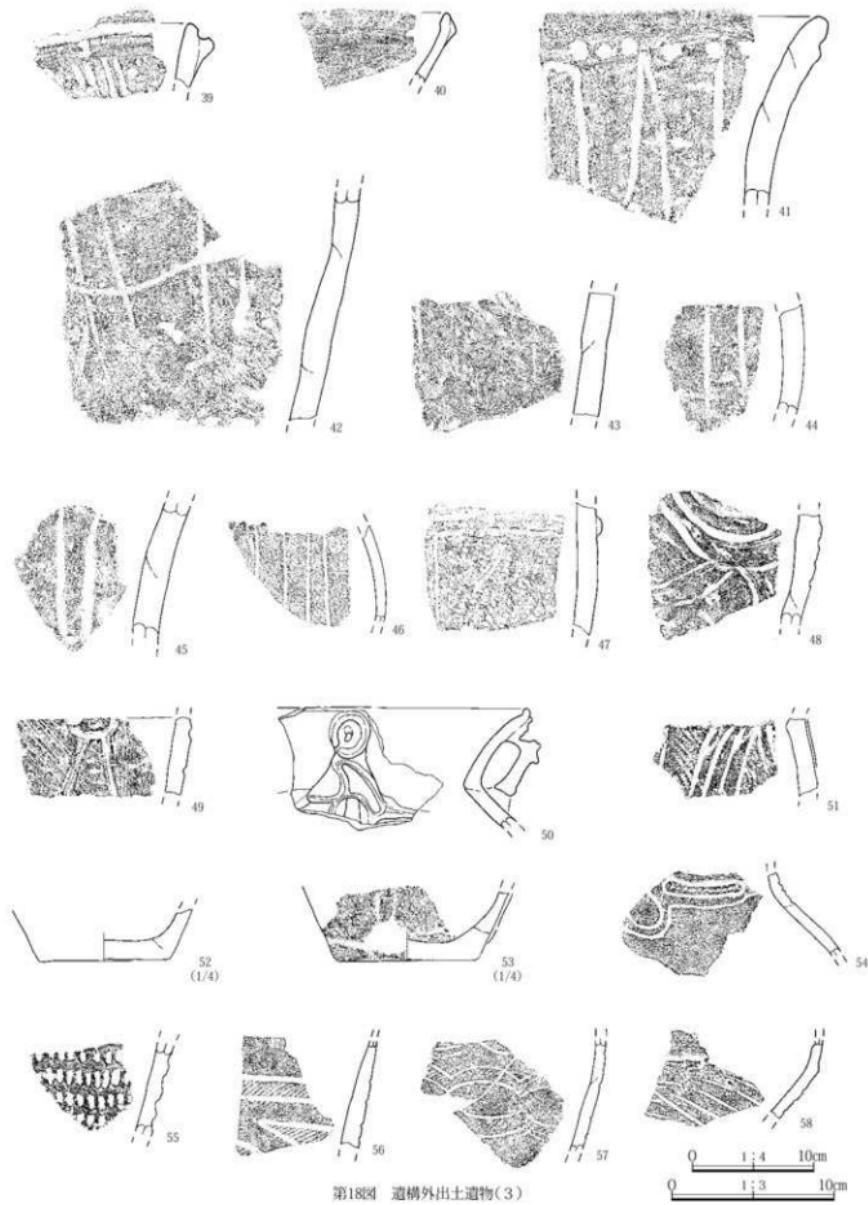


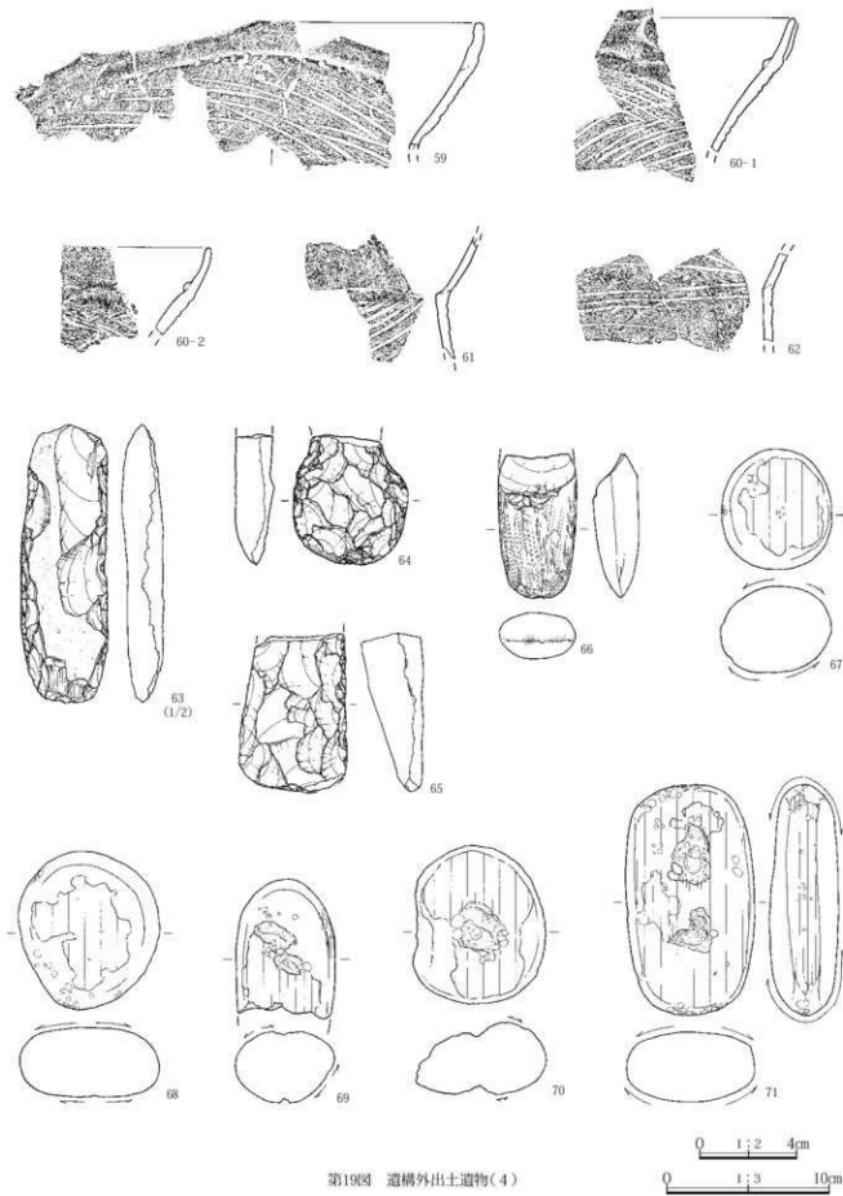
第16図 遺構外出土遺物(1)



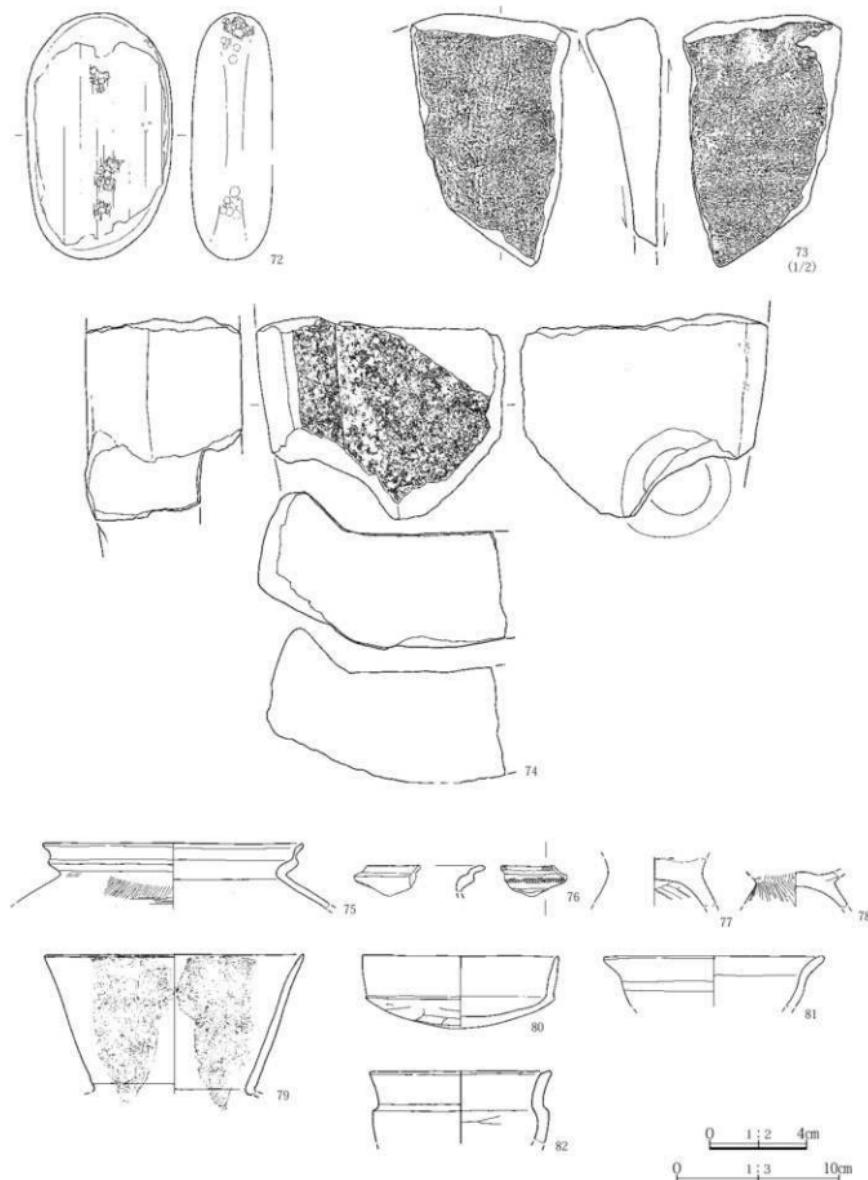
第17図 遺構外出土遺物(2)

0 1:3 10cm

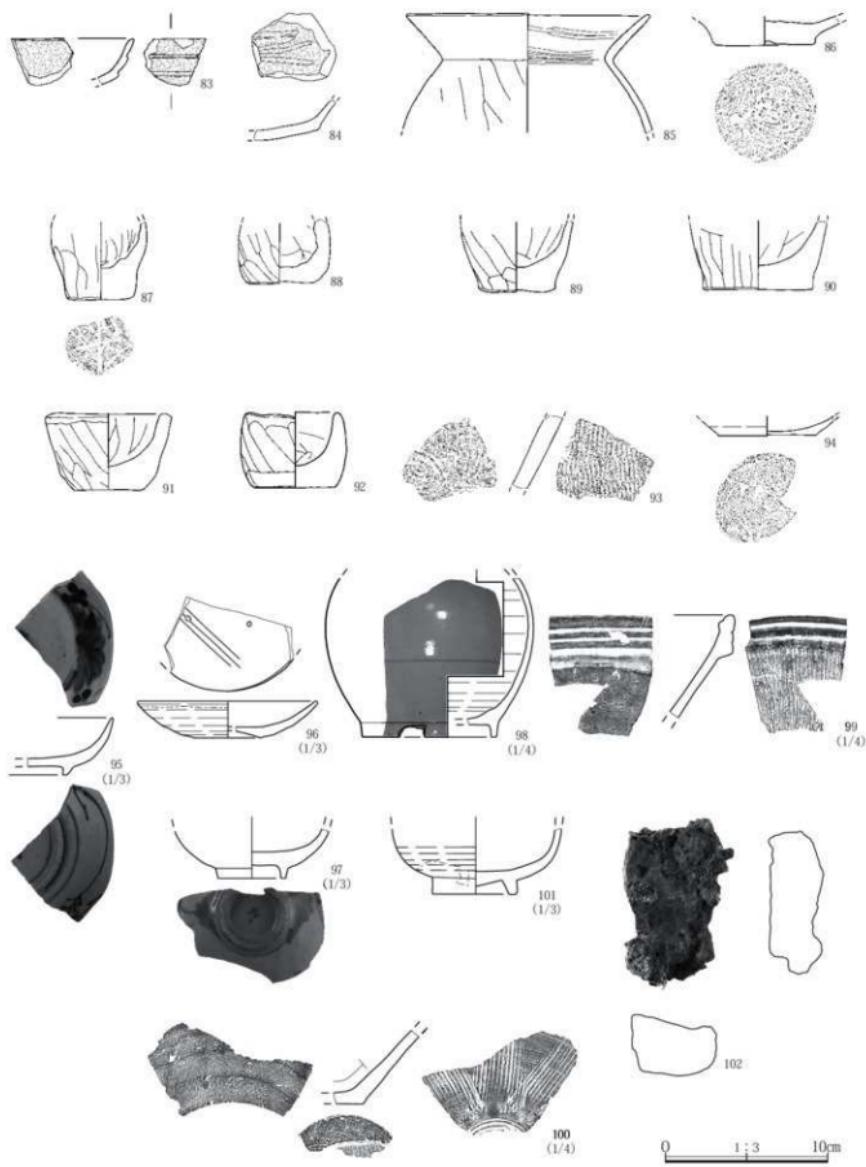




第19図 遺構外出土遺物(4)



第20図 遺構外出土遺物(5)



第21図 遺構外出土遺物(6)

第3章 工事立会時の遺構と遺物

第1節 経緯と結果

前烟K遺跡の調査終了後、遺跡内で同事業である一般県道梨木香林線道路改良工事に伴い、群馬県地域創生部文化財保護課による工事立会調査が行われた。本章では、その結果を転載する。

- 1 事業名 令和2年度一般県道梨木小林線道路改良工事業
- 2 工事立会箇所 桐生市新里町野地内
- 3 工事立会実施期間 令和2年6月8・9日(月・火)
- 4 調査担当者 群馬県地域創生部文化財保護課
補佐(埋蔵文化財係長)飯森康広
主幹 石田 真
- 5 協力機関 桐生市教育委員会
- 6 工事立会区域及び面積
事業対象地面積 約69.35m²
工事立会調査面積 約17m²
- 7 周知の遺跡の有無 あり(野-01遺跡(前烟K遺跡)
桐生市遺跡番号B0183)
- 8 工事立会調査の方法 事業予定地内において立会調査を実施した。調査では遺構検出面の認定、遺構有無の確認、遺物出土の有無の確認を行った。
- 9 工事立会調査の結果

事業地は桐生市新里町野にある。事業地が、周知の埋蔵文化財包蔵地(野-01遺跡(前烟K遺跡:桐生市遺跡番号B0183))内にあること、また掘削範囲が狭小かつ傾斜地であることから立会調査を実施した。立会調査に際しては、工事により掘削した平面及び断面を観察し確認した遺構の調査まで実施した。その結果は次のとおりである。

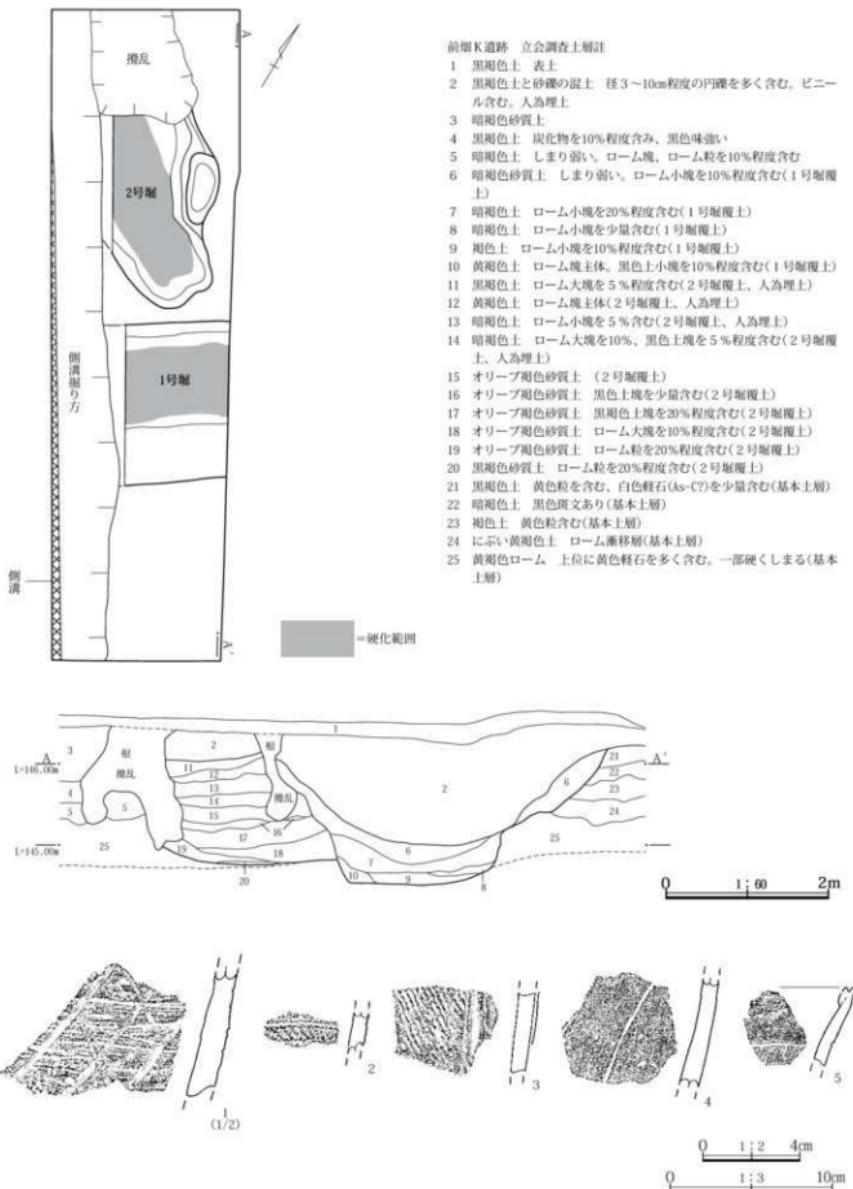
断面観察では表土の下に黒褐色から暗褐色系統の土層が堆積し、その下に黄褐色ロームが堆積していた。調査範囲の北半部ではこれ

らの土層を切る落ち込みを確認し、平面で確認したところ2条の堀跡と判断された。このため、1号堀、2号堀として調査を実施した。1号堀、2号堀は走行方向がほぼ直交し重複している。断面観察では1号堀掘削の土で2号堀を埋めているものと考えられた。また、どちらの堀の底面も硬化が認められた。遺物は、1号堀からは中近世の陶磁器が出土した。また、1・2号堀及び遺構外から縄文土器が出土した。

第2節 出土遺物について

立会調査が行われた箇所は、本書で報告した1区の北にあたり塙竈神社の西に接する。調査で得られた平面図と断面図は1/60に編集して第22図に掲載する。

出土遺物のうち図示に耐えられる縄文土器数点を併載し、観察表を第11表に記した。特に第22図1は縄文時代早期後葉の条痕文系土器であり、本書では最古の遺物となった。当地域でも好資料となるだろう。なお、1・2号堀出土の中近世陶磁器は細片のため写真図版での掲載に止めた。



第4章 総 括

前畠K遺跡では中世～近世に比定される堀2条と土坑14基、ピット9基を調査した。前畠J遺跡で得られた縄文時代の遺構は見られず、遺構外出土とした土器と石器のみの掲載となった。

大規模な1号堀は、走行が蛇行状態を示し規格性が窺えないため、館濠や郡界を示す遺構ではなく、また現在も周辺地形が凹み地境にも供されていることから、中世段階から維続する、灌漑用などの大型開発遺構として位置付けられよう。出土遺物も中世～近世陶磁器を豊富に出土しており、当地域の代表的な中世遺構となろう。

2号堀は大規模ではないが、先に調査された前畠J遺跡3区1号溝の延長に位置し同一遺構と判断できる。直線的な東西の走行を示し、一部薬研堀状の断面形を示すことから、規格性、規則性を必要とする施設を画する堀の可能性がある。館濠などが想定されよう。出土遺物として、前回調査された前畠J遺跡3区1号溝からも板碑破片が出土しており、今回出土した板碑片や中世陶器と併せて、14世紀以降に年代が与えられよう。

土坑は全体に散漫な分布を示しており、西側調査区壁

に偏る傾向を見せる。その中で、方形の平面形で箱形の断面形を示す土坑－3号坑、4号坑、6～8号坑、10号坑、12号坑が群をなし、類似した性格を示すものと考えられた。いずれも、埋土や出土遺物の様相から中世～近代にまで相当し、ある程度時間幅のある土坑設営と位置付けられ、土坑の形状から、地下式坑－墓坑群あるいはムロ－貯蔵穴群として判断しておきたい。本遺跡の調査ではこれらの土坑群からは人骨の出土は見られず、また副葬品に相当する遺物も見られなかった。故に、今回は貯蔵穴群として本土坑群を位置付けておきたい。ただ、地下式坑と考えた場合、周辺の様相からは調査区西側に居住域が予想され、あるいは屋敷墓などの性格も想定されよう。

その他の土坑としては円形土坑に角礫が出土した11号坑は桶状の痕跡が認められ、墓壙としての可能性も高い。さらに13号坑は井戸であり、このことからも周辺に屋敷、民家などの居住域が存在すると思われる。前畠J遺跡3区1号溝を切って検出された2号井戸の存在も重要であり、中世～近世にかけて周辺の農村景観も想起されよう。

遺構計測表・遺物観察表

遺 構

平 面 形：円形・不整円形・楕円形・不整椭円形・長方形・方形・不整方形・不整形から選んだ。推定形状は()で表した。

断 面 形：箱形・皿状・袋状・ピット状・不連続形から選んだ。

計 測 値：長軸と短軸は直交位置で計測した。深さは底面から確認面までの距離である。現存値は()で表した。

遺 物

—縄文土器・石器—

出土位置：挿図に番号が記された遺物は平面位置と断面位置を記した。

胎 土：土器の夾雜物を記した。混和材としての砂粒が2mm以上を粗砂粒、2mm以下は細砂粒とした。混和剤中の特徴的な鉱物粒として、石英、輝石を基準とし片岩、チャートなどが含まれた場合も明記した。また纖維も胎土の一つとして記している。

焼 成：良好な例を標準とし、焼成温度が低く土器胎土が弱い順に、軟質(脆弱)、やや軟質、良好と記した。

色 調：土器の表面色調を優先し、「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修)に準拠したが、色調名を優先し、マンセル値は併記していない。

石 材：石器、石製品の石材名を記した。

計 測 値：土器は口径・高さ・底径を基準に現存した部位を計測した。1/2以下の復元値は()で記した。破片資料の現存値は記していない。石器は長さ・幅・厚さ・重量を計測し現存値を()で記した。

文様の特徴：器形、文様構成を主とした記載で、文様要素や原体、内面整形などを併記した。

備 考：土器の時期の目安として、縄文時代六期区分と区分内の大凡の段階を記した。型式名などは本文中に触れた。

—土師器・須恵器—

種 類：文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉陶器、綠釉陶器)、土製品等に種別している。なお、古墳時代に黒色処理を施された土器については、その成形から土師器とした。その後の奈良時代中頃から出現する内面及び外表面を黒色処理された土器については、成形から黒色土器として種別してある。

器 種：文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて杯、椀、高杯、盤、皿、鉢、壺、器台、壺・瓶(長頸壺、短頸壺、平瓶、横瓶、提瓶、飴)、甕、碇等の名称を使用している。なお、杯と椀の区分は、器高/口径比が大きいものを椀としているが、明確に数値化できていない。壺と甕との区分は、頭部/胴部最大径比によって区分しているが、例外として胴部最大径より頭部系径の大きい形態である広口壺と呼称しているものも存在する。

計 測 値：計測箇所は、以下のように省略している。

口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、摘：摘径、カ：杯蓋等のカエリ径、頸：頸部径、胴：胴部最大径、孔：瓶・有孔鉢などの底部に設けられた孔径等である。この他の略称についてはそれぞれ備考等に表示した。なお、単位はcmである。

胎 土：記載中の表現にある細砂粒は、径2mm以下、粗砂粒は2~5mmのものを表す。5mm以上は、礫と表

- 示した。
- 焼成**：土師器は、比較的硬質に焼成しているものを「良好」、軟質や脆い状態のものを「軟質」、「不良」で表示してある。須恵器は、「還元焰」、「酸化焰」で表示してある。
- 色調**：農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色調帖』に準拠している。
- 特徴**：微：成形部を中心記載している。
- 備考**：灰釉陶器は、猿投古窯跡群と東濃古窯跡群を区分し、可能な限り各窯式期を判断して記載している。緑釉陶器は、東海産、畿内産、近江産を区分し、可能な限り年代または窯式期を判断して記載している。
- 掲載縮尺：原則1/3で掲載している。大きさによっては、1/1～1/4の縮尺で掲載しているものがある。その場合は、それぞれの遺物図に明示してある。

第2表 塚計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	形状	備考	遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	形状	備考
1号塚	—	472	223	X=011～020 Y=025～033	箱型		2号塚	—	360	121	X=957・960 Y=037～039	—	前縁J 3区1溝と同一

第3表 土坑計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	形状	備考	遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	形状	備考
1号土坑	(164)	(58)	11	X=030～032 Y=037	—		8号土坑	152	(66)	42	X=994・995 Y=029～030	(長方形) 箱形	
2号土坑	56	52	22	X=004・005 Y=026	不整円形 調底状		9号土坑	124	86	19	X=991・992 Y=030・031	不整椭円形 皿状	
3号土坑	226	162	73	X=997～999 Y=028～030	不整長方形 箱形		10号土坑	154	(124)	31	X=983・984 Y=032～033	(不整椭円形) 箱形	
4号土坑	(400)	(216)	136	X=002～006 Y=026～030	不整長方形 箱形		11号土坑	98	(86)	32	X=981・982 Y=033	(不整円形) 袋状	
5号土坑	(174)	(44)	55	X=003・004 Y=026～030	(長方形) 箱形		12号土坑	168	102	23	X=980・981 Y=032～034	穢長方形 箱形	
6号土坑	(166)	144	49	X=995～997 Y=028～030	(長方形) 箱形		13号土坑	86	86	—	X=979 Y=032～033	円形 (圓形)	井戸
7号土坑	128	(74)	51	X=995・996 Y=028	(長方形) 箱形		14号土坑	132	78	73	X=996・997 Y=028・029	不整方形 袋状	

第4表 ピット計測表

遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	形状	備考	遺構名	長軸	短軸	深さ	位置	形状	備考
1号ピット	26	24	37	X=033 Y=037	不整円形		6号ピット	36	36	22	X=978・979 Y=028	不整円形	
2号ピット	32	28	48	X=021 Y=033	不整円形		7号ピット	28	24	20	X=978・979 Y=029	不整円形	
3号ピット	32	30	15	X=963・964 Y=038	不整円形		8号ピット	56	48	80	X=010・011 Y=028	不整円形	
4号ピット	(38)	(32)	9	X=964・965 Y=038	不整形		9号ピット	48	44	43	X=008・009 Y=028	不整円形	
5号ピット	50	46	39	X=977・978 Y=029	不整円形								

遺物觀察表

遺物觀察表

第5表 1号塚出土遺物

種 図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
			口	底				
第8図 PL.7	1 肥前磁器 染付皿	口縁部一部、 底部1/4	口 底	高 2.5	3.3	灰白	軸は白瀬し焼成不良。体部内面は唐草文。底部内面はコンニャク印判による五弁形。高台内に1重巻線。	17世紀後葉 から18世紀中葉。 4片接合。
第8図 PL.7	2 肥前磁器 白磁小杯	口縁部一部、 底部完	口 底	(6.8) 2.5	3.9	白	残存部は無文。高台脇は削り込む。	18世紀。 2片接合。
第8図 PL.7	3 肥前磁器 染付小碗	口縁部1/4、 底部1/2	口 底	(7.6) (3.0)	3.7	白	残存部外面にコンニャク印判による紅葉文1か所。内面は無文。	18世紀前葉～ 中葉。
第8図 PL.70	4 肥前磁器 染付碗	口縁部2/、 底部完	口 底	8.9 3.5	4.7	灰白	外面上花卉文。内面は無文。軸は白瀬し、焼成不良。	18世紀前葉か ら中葉。 11片接合。
第8図 PL.7	5 肥前磁器 染付碗	1/8	口 底	(9.9) —	—	白	外面上はコンニャク印判による植物文。	18世紀前葉～ 中葉。 2片接合。
第8図 PL.7	6 肥前磁器 染付碗	口縁部1/4、 底部1/2	口 底	(9.7) 3.8	5.0	灰白	外面上に雪輪梅樹文。内面は無文。高台内不明路。	18世紀中葉か ら後葉。
第8図 PL.7	7 濱戸・美 濃陶器 染付端反 碗	底部3/4	口 底	— 3.8	高 —	白	外面上に染付。底部内面と重巻線内に「末」字状文。	19世紀前葉か ら中葉。
第8図 PL.7	8 肥前磁器 染付皿	1/3	口 底	(12.3) (7.6)	3.3	灰白	軸は白瀬し焼成不良。体部内面は施釉化した唐草文か。外面上は簡略化した唐草文。高台内に1重巻線。底部内面に染付が僅かに確認できるが、文様は不明。	18世紀中葉か ら19世紀初 頭。 5片接合。
第8図 PL.7	9 肥前陶器 陶胎染付 碗	口縁部1/3、 底部完	口 底	(10.5) 5.2	7.0	灰白	高台径やや大きい。外面上東屋山水文。内面は無文。貫入する。	17世紀末から 18世紀前葉。 2片接合。
第8図 PL.7	10 肥前陶器 陶胎染付 碗	1/2	口 底	(10.3) 4.6	7.4	灰、橙	外面上東屋山水文。内面は無文。貫入する。胎上は部分的に橙色。	18世紀前葉か ら中葉。 4片接合。
第8図 PL.7	11 濱戸・美 濃陶器 せんじ窯	1/3	口 底	(9.3) (3.6)	5.4	灰白	灰釉と鉄軸の左右掛け分け。高台端部のみ焦輪。	18世紀中葉か ら後葉。 4片接合。
第8図 PL.7	12 濱戸・美 濃陶器 せんじ窯	口縁部2/3、 底部完	口 底	10.0 4.1	5.2	灰白	口縁部外面に染付。外面上縁部下の枝線はシャープで上部に沈線ある。内面から高台脇に灰釉。貫入する。	18世紀中葉か ら後葉。 9片接合。
第8図 PL.7	13 濱戸・美 濃陶器 銀錠碗	口縁部一部、 底部1/2	口 底	(10.4) (4.2)	5.2	灰白	外面上縁部下に螺旋状の沈線。内面から外面上縁部下に灰釉。以下に鉄軸。高台端部のみ焦輪。灰釉に貫入する。	18世紀後葉か ら19世紀前 葉。
第8図 PL.7	14 濱戸・美 濃陶器 丸皿	口縁部一部、 高台完	口 底	(10.6) 4.9	7.1	灰白	外面上縁部下は回転泡割り。内面から高台脇に鉄軸。	18世紀中葉か ら後葉。 7片接合。
第8図 PL.7	15 濱戸・美 濃陶器 铁筋鉢	1/8	口 底	(31.0) —	—	黄灰	外面上縁部以下は回転泡割り。体部内面に鉄筋。内外面灰釉施すが、軸は薄い。	17世紀中葉か ら後葉。
第9図 PL.7	16 濱戸・美 濃陶器 尾呂德利	体部1/2、底 部完	口 底	— 10.3	高 —	灰白	体部外面下半は回転泡割り。内面無釉。外面部施釉後に体部外面下位以下を拭う。肩部外面に灰釉を掛ける。	17世紀後葉～ 18世紀中葉。 9片接合。
第9図 PL.7	17 濱戸・美 濃陶器 すり鉢	1/6	口 底	— —	高 —	淡黄	小型のすり鉢。外面上縁輪。	18世紀後葉 か。
第9図 PL.7	18 丹波陶器 すり鉢	1/4	口 底	— —	高 —	灰白、器表にぶ い赤褐	内面のすり目は深入る。底部内面のすり目は同心円状。底部内面を険き鉄配紫喰っているようである。	江戸時代。
第9図 PL.7	19 堀・明石 陶器 すり鉢	1/8	口 底	— —	高 —	赤褐	口縁部内面の突帯は、明顯であるが丸みを帯びる。体部外面上縁輪削り。内面のすり目は口縁部下で撫で消す。	18世紀前葉～ 中葉。
第9図 PL.7	20 在地系上 器 口鉢	1/5	口 底	— —	浅黄、器表灰	口縁部は緩く屈曲気味に外反。外面上の器表剥離部分多い。口縁部は磨って平坦に加工。	中世。	
第9図 PL.7	21 在地系上 器 焰培	小片	口 底	— —	高 5.0	浅黄、器表暗灰 から黒	平底。外面上半から底部外面は縮締状。	江戸時代。
第9図 PL.7	22 在地系上 器 焰培	小片	口 底	— —	高 5.5	灰黄	断面中央は灰黄色。器表付近から器表は灰白色。口縁部から体部外表面は灰黃褐色。体部内面中央は凹陷状に窪む。吊り手下部は底部内面に貼り付ける。	江戸時代。 2片接合。
第9図 PL.8	23 在地系上 器 焰培	1/4	口 底	— —	高 5.0	橙、外面部表部 分的に暗灰	外面上位に紐作り痕残る。体部外下面下端に幅の狭い匯撫で。内面上位に織目。	江戸時代。 2片接合。
第9図 PL.8	24 在地系上 器 焰培	1/6	口 底	(36.0) (32.8)	高 5.5	灰黄	外面部表は黒褐色。内面上位に紐作り痕残る。吊り手は口縁部内面から底部内面に貼り付け。	江戸時代。 3片接合。

遺物観察表

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第10回 PL.8	25	有地系上 器 火鉢か 鍋	-	口 底	-	高 10.0	褐灰	口縁部の断面中央は暗灰色、器表は部分的に黒色。底部外 面は縮縫状痕。残存部に口所脚を貼り付け。全体では4 脚であろう。口縁端部外面は部分的に磨って平滑となる。	2片接合。 江戸時代か。
第10回 PL.8	26	彌戶・美 濃陶器か 灰瓦	口縁部1/2、 底部完	口 底	11.3 3.8	高 5.9	白	機械機械成型。外面に茶色と酸化コバルトによる吹き墨。	近現代。 2片接合。
第10回 PL.8	27	製作地不 詳磁器 壺反碗	1/2	口 底	(10.7) (4.0)	高 5.4	灰白、橙	外面は縮縫を除き型番振り。底部内面は三友か。軸や 白闇。底部附近は橙色で焼成不良。	近現代。
第10回 PL.8	28	有地系上 器 焰	小片	口 底	-	高 -	橙	器高く丸底。外面器表はやや黒変し、口縁端部外面に燒 付着。	近現代。
第10回 PL.8	29	石製品 砾石	1/2	長幅 4.7	(9.3) 厚 132.4	厚 (2.1) 重	挂質粘板岩	鍛冶砥石。画面には擦痕もあり、砾石としては上質とは いえないが、仕上げ紙ということになろう。破損後も使用 され、四隅が研ぎ減っている。	
第10回 PL.8	30	石製品 砾石	破片	長幅 2.7	(6.9) 厚 77.3	厚 (2.9) 重	砥沢石	手持ち砥石。表面裏とも著しく片減る。小口部および両側 面には切削痕が弱く残る。	
第10回 PL.8	31	石製品 不明	破片	長幅 4.7	3.0 厚 5.5	厚 重	頁岩	上端から4mm下に深3.5mmの孔を穿つ。孔は両側穿孔に よるが、裏面側は削て凹状を止めている。両辺とも破 損。本來の形状は不明。	
第10回 PL.8	32	石造物 板碑片	主尊部破片	長幅 (4.5)	(12.2) 厚 128.0	厚 (1.6) 重	雪母石英片岩	蓮座花弁の一部が残るが、主尊か脇侍に伴うものは不明。 花弁の跡から、年代は14世紀代か。	
第10回 PL.8	33	石造物 板碑片	破片	長幅 (7.6)	(10.9) 厚 2094	厚 (1.7) 重	緑色片岩	部位不明。碑面は一部を残して大きく剥落。主尊・年代共 に不明。裏面側縫部が状状に摩滅。二次的な加工か。	
第10回 PL.8	34	铁津 柳形浮	圓完形	縱 横 8.6	11.0 厚 424.6	厚 重		ダメなし。磁性10mm。下面に1cm角前後の礫や細かな 砂が混じり、1.7cm×1.2cmの木炭痕が確認される。浮質 は表面上面に気泡が多い。	

第6表 2号堀出土遺物

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第11回 PL.8	1	在地系上 器 皿	1/4	口 底	(10.0) (6.4)	高 2.3	橙	左回転系無調整。体部は内清。	江戸時代。
第11回 PL.8	2	在地系上 器 焰	小片	口 底	-	高 6.3	灰白	器高く、内面中位に段差。体部外側下位に指頭圧痕状の くぼみが連続するが、縮縫状痕は認められない。口縁端部 上面は僅かにくぼみ、外端部は棱をなす。	16世紀後葉か ら17世紀中葉か。
第11回 PL.8	3	石造物 板碑	上部破片	長幅 16.0	(16.4) 厚 1083.1	厚 2.4 重	緑色片岩	碑面はやや摩滅するが、頂部二条線と浅い彫りの阿弥陀佛 子(キリギリ)が残る。碑面両端部は面取。裏面は僅かに 成形の工具痕が残る。二条線を削ぐが、小型化と主導の 彫りから、年代は14世紀中葉か。	

第7表 3号土坑出土遺物

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第12回 PL.8	1	在地系上 器 皿	1/2	口 底	10.9 6.5	高 2.3~ 2.7	橙	底部を回転系切。施釉を左回転調整。体部から口縁部はや や歪む。体部内面と底部端は丸みを帯びる。体部外面に糸が 巻き付いた痕が残る。	15世紀か。 3片接合。

第8表 6号土坑出土遺物

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第13回 PL.8	1	彌戶・美 濃陶器 小丸 碗	1/5	口 底	(7.5) -	高 -	灰白	いわゆる太白手。外面に直か竹文。口縁部内面は2重輪線。	18世紀末から 19世紀前葉。
第13回 PL.8	2	在地系上 器 焰	小片	口 底	-	高 5.1	灰白、器表灰黒	体部中位外面に紐作り痕残る。口縁部外面器表は黒変。	江戸時代。
第13回 PL.8	3	在地系上 器 焰	小片	口 底	-	高 -	淡黄	器高く丸底。耳は内面に貼り付けるが、剥落する。体部 外面に焼付着。	近現代。

第9表 11号土坑出土遺物

種 国 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第13回 PL.8	1	彌戶・美 濃陶器 鋸底	1/6	口 底	(8.0) -	高 -	灰白	体部外側から高台輪、回転施文具により施文。内面から11 縫縫部外面に鋸縫。体部外面にやや黄色味を帯びた灰釉。 やや焼成不良。	18世紀後葉か ら19世紀前葉。
第13回 PL.8	2	在地系上 器 焰	小片	口 底	-	高 5.2	灰白、器表暗灰	口縁端部は平坦。体部内面中位に紐作り痕残る。体部外 面下端に鋸縫。内面に耳貼り付け痕残る。	江戸時代。

遺物觀察表

第10表 遺構外出土遺物

種 国 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 深鉢	計測値	胎土/燒成/色調 材石・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第16回 PL.9	1 縄文土器	1号縦 口縁部破片		縦白色粒・輝石・ 良好/灰褐色	薄手の層厚を呈し口縁部外反する。横位Rしが覆う。内面 平滑な横位撫で調整	前期後葉
第16回 PL.9	2-1 縄文土器	1号縦 口縁部破片		縦石英・輝石/良 好/にい/灰褐色	口縁部に斜位刻みを施す横位隕擦を設け。小型のC字状爪 形文を横位多段に施す。内面は丁寧な研磨を加える	前期後葉
第16回 PL.9	2-2 縄文土器	1号縦 口縁部破片		縦石英・輝石/良 好/灰褐色	6条單位の対向する斜位角線による肋骨文。中位に縦位平 行弦線を施し側突文を重ねる。内面平滑な撫で	前期後葉
第16回 PL.9	3 縄文土器	1トレス 体部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/にい/黄 褐色	斜位刻みを加え矢羽状に施した浮線文を横位多段に配す。 地文は斜位R L。内面平滑な横位撫で調整	前期後葉
第16回 PL.9	4 縄文土器	1トレス 体部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/にい/黄 褐色	斜位刻みを加えた浮線文を横位多段に配す。地文は斜位R L。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第16回 PL.9	5 縄文土器	1区 体部破片		縦石英/白色粒/ 良好/にい/黄褐色	斜位刻みを加えた浮線文を横位多段に配す。地文は斜位R L。内面は平滑な撫で調整	前期後葉
第16回 PL.9	6 縄文土器	6坑 体部破片		粗石英・輝石・雲 母/白色粒/良好/ 黒褐色	單列施文の角押文による弧状意匠。あるいは劍先状意匠へ の変化か。内面平滑な撫で調整	中期中葉
第16回 PL.9	7 縄文土器	2号縦 体部破片		粗石英大・輝石・ 雲母/白色粒/良 好/黒褐色	刻みを加えた輻広隕線による渾溝状意匠。側線は細沈線。 内面は丁寧な研磨を施す	中期中葉
第16回 PL.9	8 縄文土器	1号縦 体部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/明褐色	体部中位に幅広の横位隕線を設け刻みを加える。以下無節 文を複位施文する。内面は平滑な撫で調整。	中期中葉末
第16回 PL.9	9 縄文土器	1号縦 体部破片		粗石英・輝石/白 色粒/良好/褐褐色	体部下手か。捺糸R 縱位施文。内面弱く研磨を加える	中期中葉
第16回 PL.9	10 縄文土器	1号縦 口縁部破片		粗石英・チャコ ト/良好/黄褐色	口縁部に刻み、口縁部は單列の角押文の区画内に沿い、斜 位角押文3条が施される。内面平滑な横位撫で調整	中期中葉
第16回 PL.9	11 縄文土器	4トレス 体部破片		粗石英・雲母/良 好/にい/黄褐色	陶片による波状渦巻文か。側線は撫で。外面はヒダ状圧痕 残る。内面平滑な横位撫で調整	中期中葉
第16回 PL.9	12 縄文土器	1号縦 口縁部破片		縦石英/白色粒/ 良好/明赤褐色	口縁部端部に面を設ける。口縁部は肥厚し底上半は内湾 である。外側にも研磨を加える。外面僅に赤彩痕がある	中期後葉
第16回 PL.9	13 縄文土器	1号縦 口縁部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/にい/ 黄褐色	口縁部に横位沈線3条を設け円形刻突文を重ねる。以下捺 糸Rを複位施文する。内面平滑な横位撫で調整	中期後葉
第16回 PL.9	14 縄文土器	1トレス 口縁部破片		粗石英/白色粒/ 良好/黒褐色	大型斜位跡か。降継による口縁部区画文。沈線を側線とし、 横の矢羽状弦線を充填する。内面横位研磨を加える	中期後葉
第16回 PL.9	15 縄文土器	1トレス 口頭部破片		縦石英/白色粒/ 良好/灰白色	2条降継による口縁部区画文と弧状意匠。側線は沈線で区 画されは横位R Lを施す。内面横位研磨を加す	中期後葉
第16回 PL.9	16 縄文土器	1号縦 体部破片		縦石英/白色粒/ 良好/にい/褐褐色	横位と斜位によって沈線を施す弧状意匠構成。側線は浅い沈線。 地文は横位R Lを施す。内面は横位・斜位研磨を加える	中期後葉
第16回 PL.9	17 縄文土器	1号縦 体部破片		粗石英/白色粒/ 良好/灰褐色	横位と斜位によって沈線を施す弧状意匠や逆V字状意匠が配され る。2条沈線によると横位山形文や弧線文を配す。地文 はは横位糸R。内面平滑な撫で調整	中期後葉
第16回 PL.9	18 縄文土器	1トレス 体部破片2点		粗石英・輝石/白 色粒/良好/暗赤 褐色	内側する体部上半。横位沈線2条を設け円形刻突文を重ね る。以下2条沈線によると横位山形文や弧線文を配す。地文 はは横位糸R。内面平滑な撫で調整	中期後葉
第16回 PL.9	19 縄文土器	1号縦 体部破片		粗石英・輝石/白 色粒/良好/浅 黄褐色	内側する体部中位。内面沈線による施文で大幅な弧状意匠 や横位意匠を配す。地文は横位糸R L。内面弱く研磨を加える	中期後葉
第16回 PL.9	20 縄文土器	1号縦 口頭部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/灰 褐色	降継による口縁部区画文。区画内は沈線を側線とし横位研 磨を加えるが一部に横位しが残る。頭部及び内面も丁 寧な横位研磨を施す	中期後葉
第16回 PL.9	21 縄文土器	1号縦 体部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/灰 褐色	降継による口縁部区画文構成。地文は横位付加糸R L + R。内面 丁寧な横位研磨を加える	中期後葉
第17回 PL.9	22 縄文土器	1トレス 口縁部破片		縦石英少・輝石・ 角空・白色粒/良 好/明黃褐色	降継による口縁部区画文構成。満登文は剥落する。区画内 は浅い沈線を側線とし縦位沈線を充填する。内面横位研磨 を加える	中期後葉
第17回 PL.9	23 縄文土器	1号縦 口頭部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/黄褐色	大ヒダ跡による口縁部区画文と区画文構成。満登文は剥 落する。区画内は浅い沈線が沿い縦位R L Lを施す。内面 横位研磨を加える	中期後葉
第17回 PL.9	24 縄文土器	1トレス 口縁部破片		縦石英・白色粒/ 良好/灰褐色	降継による口縁部端部区画文構成。区画内は幅広の沈線 を側線とし、横位R Lを充填する。頭部は横位・縦位R L による羽状弦線を施す。内面丁寧な縦位研磨を加える	中期後葉
第17回 PL.9	25 縄文土器	3トレス 口縁部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/褐灰 色	降継による口縁部満登文と区画文構成。横線は幅広の沈線。 区画内は浅い円形刻突文を充填する。体部は横手状沈線文 の上端を見る。内面横位研磨を加える	中期後葉
第17回 PL.9	26 縄文土器	1トレス 体部破片		縦石英・輝石/白 色粒/良好/にい/ 褐褐色	体部中位か。沈線に兩された磨消部中位に縦位沈線を重ね る。地文は横位糸R L充填施文。内面弱く研磨を加える	中期後葉
第17回 PL.10	27 縄文土器	1号縦 体部破片		縦石英・輝石/角 空/白色粒/良 好/にい/黄褐色	頭部に横位隕線を設け体部は2条の沈線に兩された磨消部 満登文構成を配す。磨消部中位に縦位沈線を重ねる。施文 部は横位糸R L充填施文。内面は平滑な横位撫で調整	中期後葉
第17回 PL.10	28 縄文土器	14坑 口頭部破片		縦輝石多・白色 粒/良好/にい/ 褐褐色	頭部に2条の横位隕線を設ける。口縁部は縦位R Lを施す。 体部はは横下垂沈線に兩された磨消部満登文構成。施文部は板 糸R Lを充填する。内面丁寧な横位研磨。外表面崩壊	中期後葉

種 団 PL.No.	No.	種 類 器 類	出土位置 残存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第17回 PL.10	29	縄文土器 深鉢	I区 体部破片		磁石英・輝石・ チャート・白色粒 /良好/にぶい黄 褐色	体部上に横位沈線3条を設け、体部は縦位沈線に画された階層部懸垂構成を示す。施文部は縦位R L R充填施文。内面横位研磨を加える	中期後葉
第17回 PL.10	30	縄文土器 深鉢	Iトレ 体部破片		磁石英・輝石・白 色粒/良好/黑褐色	体部上半か。降継による逆U字状意匠あるいは懸垂文か。側縁は横位R Lを充填する。内面横位磨で調整	中期後葉
第17回 PL.10	31	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・輝石・角 安/白色粒/やや 軟質/にぶい黄 褐色	縦位沈線に画された施文部と磨消部による懸垂構成。施文部は縦位L R充填施文。内面平滑な撫で調整	中期後葉
第17回 PL.10	32	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・白色粒/ 良好/褐色	沈継によるU字状意匠と逆U字状懸垂文が配される。意匠内はR L充填施文。内面横位研磨を丁寧に施す	中期末葉
第17回 PL.10	33	縄文土器 深鉢	I号瓶 口縁部破片		磁石白/白色粒/ 良好/灰褐色	透視手縛子。口縁部に横位沈線2条に画された帯状施文部を設けた上縁帶状施文部による意匠文が派生する。施文部はR L充填施文。磨消部及び内面は丁寧な研磨を加える	後期初頭
第17回 PL.10	34	縄文土器 深鉢	Iトレ 体部破片		磁石英・輝石・白 色粒/良好/明褐色	沈継で画された施文部による弧状・渾巣状意匠。無節Lを充填施文する。内面は弱い研磨で調整	後期初頭
第17回 PL.10	35	縄文土器 深鉢	Iトレ 体部破片		磁石英・白色粒/ 良好/暗褐色	沈継で画された施文部による懸垂文と弧状意匠。施文部はI Rを充填する	後期初頭
第17回 PL.10	36	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・輝石・白 色粒/良好/褐色	大型深鉢体部中位か。沈継で画された施文部による弧状意匠と逆U字状意匠。列点状突突如が充填される。内面横位研磨を加える	後期初頭
第17回 PL.10	37	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・輝石・白 色粒/良好/にぶい 黄褐色	沈継に画された幅狭施文部による弧状意匠が配される。列点状突突如を充填する。磨消部及び内面は弱い研磨を加える	後期初頭
第17回 PL.10	38	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・白色粒/ 良好/灰褐色	沈継で画された幅狭施文部と磨消部による懸垂構成か。列点状突突如を充填する。内面丁寧な横位研磨を加える	後期初頭
第18回 PL.10	39	縄文土器 深鉢	Iトレ 口縁部破片		磁石英・輝石・白 色粒/良好/黑褐色	厚手の器厚を呈す。口縁部沈継を設け幅の広い内皮平行沈継を縦位に施す。施文は縦位R Lか。内面平滑な撫で	後期前葉
第18回 PL.10	40	縄文土器 深鉢	3トレ 口縁部破片		磁石白/白色粒/ 良好/黑褐色	口縁部内底。無文。内外縁は鋸歯で丁寧な研磨を加える	後期前葉
第18回 PL.10	41	縄文土器 深鉢	I号瓶 口縁部破片		磁石英・輝石・白 色粒/やや軟質/ にぶい黄褐色	大型深鉢。口縁部に横位に連ね、以下体部は縦位沈継で画された逆U字状意匠を配す。口縁部のみ研磨を加える	後期前葉
第18回 PL.10	42	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・輝石・白 色粒/やや軟質/ にぶい黄褐色	大型深鉢体部下半。2条の縦位沈継による懸垂構成。内面平滑な撫で調整。外器面磨滅	後期前葉
第18回 PL.10	43	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・輝石・白 色粒/やや軟質/ にぶい黄褐色	体部に位か。縦位沈継を施す。内面平滑な撫で調整。外器面磨滅	後期前葉
第18回 PL.10	44	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・輝石・角 安/白色粒/やや 軟質/浅黄褐色	体部中位。2条の縦位沈継による懸垂構成。内面撫で調整。外器面磨滅	後期前葉
第18回 PL.10	45	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石英・輝石・角 安/白色粒/やや 軟質/明黄褐色	外反する体部。2条の沈継による幅狭の懸垂構成。内面平滑な撫で調整。外器面磨滅	後期前葉
第18回 PL.10	46	縄文土器 深鉢	I区 体部破片		磁石白/白色粒/ 良好/浅黄褐色	内凹する体部上半。縦位沈継による施文部と磨消部による懸垂構成。施文部は無節Lを充填施文する。内面平滑な横位研磨で調整。外器面磨滅	後期前葉
第18回 PL.10	47	縄文土器 深鉢	2トレ 体部破片		磁石英・チャーピー ト・白色粒/良好/ にぶい黄褐色	体部上半に横位降継を設け体部は縦位沈継2条による懸垂構成か。施文は縦位R L。内面平滑な横位研磨で調整	後期前葉
第18回 PL.10	48	縄文土器 深鉢	I区 体部破片		磁石白/白色粒/ 良好/にぶい 褐色	2・3条の浅い沈継による弧状意匠が配される。やや乱雑な施文。外側面とも研磨を加える	後期前葉
第18回 PL.10	49	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石白/角安・白 色粒/良好/褐色	側面の横状把手。頭部の円形突起中央と下端中央に孔を穿つ。把手上面は粗縁線による弧状意匠が配され両下端より横位降継が派生する。内面横位研磨を加える	後期前葉
第18回 PL.11	50	縄文土器 注口土器	1号瓶 口縁・頸部破 片		磁石英・輝石・角 安/白色粒/良好/ 灰褐色	背面の横状把手。頭部の円形突起中央と下端中央に孔を穿つ。把手上面は粗縁線による弧状意匠が配され両下端より横位降継が派生する。内面横位研磨を加える	後期前葉
第18回 PL.11	51	縄文土器 深鉢	I号瓶 体部破片		磁石白/角安・白 色粒/良好/にぶい 褐色	体部中位。縦位沈継を設け縦位孤状沈継4条が派生する。施文は縦位R L充填施文。内面は横位撫で調整	後期前葉
第18回 PL.11	52	縄文土器 深鉢	I区 底部1/3残存	底 (11.0)	磁石英・輝石/白 色粒/良好/にぶい 黄褐色	強く聞く体部下半。無文で縦位撫で調整を施す。内面は弱い撫でにて止まる	後期前葉
第18回 PL.11	53	縄文土器 深鉢	I号瓶 底部のみ残存	底 11.6	磁石白/角安・白 色粒/良好/にぶい 黄褐色	強く聞く体部下半。縦位降継による懸垂構成。4単位か。頭部はR Lを施すが器面磨滅のため判然としない	後期前葉
第18回 PL.11	54	縄文土器 注口土器	Iトレ 体部破片		磁石英・輝石/良 好/にぶい黄褐色	肩部は凸出した頭部は沈継で画された横長筋で区画文を配す。区画内は斜突文が充填する。体部上半に2条の沈継にによる環状意匠が配される。内面頭部は研磨、体部は弱い撫で調整	後期前葉

遺物觀察表

種 図 PL. No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値		胎上焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			横幅	縦幅			
第18回 PL. 11	55 碑文土器 深鉢	1号縫 体部破片			粗石英・輝石・良好 好に、よい黄褐色	棒状工具による縦列刺突文が横位多段に配される。内面平滑な部で調整	後期前葉 異系統か
第18回 PL. 11	56 碑文土器 深鉢	1トレ 体部破片			粗石英・輝石・良好 好に、よい黄褐色	体部上半か。器厚差が著しい。沈線で画された施文部と磨消部による幾何学状図文構成。施文部施文はL R充填施文。磨消部及び内面は研磨を加える	後期前葉
第18回 PL. 11	57 碑文土器 深鉢	2トレ 体部破片			粗石英・輝石・角安 良好/黄褐色		
第18回 PL. 11	58 碑文土器 深鉢	2トレ 預部破片			粗石英・白色粒 良好/黄褐色	L/R線無文。口縫部周辺部に刻みを施す。側部は斜位沈線を施す。内面弱い横位研磨を加える	後期中葉
第19回 PL. 11	59 碑文土器 深鉢	2トレ 口縫部1/4残存	口 (26.0)		粗石英・白色粒 良好/暗灰黄色	波状線。波頂部は緩やか双岐状。体部中央に屈曲する。外側面口縫部緩やかに屈曲無文。屈曲部に縦ら刻みを重ねる。体部は斜位沈線を施す。内面弱い横位研磨を加える	後期中葉
第19回 PL. 11	60-1 碑文土器 深鉢	1号縫 口縫部破片			粗石英・輝石・片岩・白色粒/良好	L/R線に低位突起を付し、下端で緩やかに屈曲する。体部は横位矢羽状沈線を配す。内面内稜を付し丁寧な研磨を加える	
第19回 PL. 11	60-2 碑文土器 深鉢				粗石英・輝石・良好/黄褐色		後期中葉
第19回 PL. 11	61 碑文土器 深鉢	1号縫 預部破片			粗石英・片岩/良好 好/黒褐色	L/R線部は無文で体部は斜位沈線を施す。内稜顯著で丁寧な研磨を加える	後期中葉
第19回 PL. 11	62 碑文土器 深鉢	2トレ 体部破片			粗石英・輝石・良好/黄褐色	体部側面部に横位沈線を設け。上半、下半とも斜位沈線を施す。内面弱い研磨を加える	後期中葉
第19回 PL. 11	63 打製石斧	完形	長幅 11.4 3.6	厚 1.8 91.8	黑色貝岩	背面上面の割離面と裏面側面離面の打点は表面で一致。側面加工も両側面が基本。背面側面部に摩耗があるほか、裏面部に登巻形がある。短形。	
第19回 PL. 11	64 打製石斧	1/2	長幅 7.9 7.0	厚 2.4 173.5	ホルンフェルス	刃部を半部を欠損する。刃部は弧状を呈し、刃底摩耗する。刃部に比べ右側縁は深く抉られており、刃側に刃部が固定されるものと見られる。	
第19回 PL. 11	65 打製石斧	1/2	長幅 9.6 6.6	厚 3.8 250.1	ホルンフェルス	大型の細刃削形を用い、荒く側縁加工する。側縁・刃部は大刀く被覆。対称性に乏しい。未製品か。	
第19回 PL. 11	66 磨製石斧	破片	長幅 (8.8) 4.8	厚 2.8 175.6	ホルンフェルス	表面裏面とも丁寧に研磨され、縦方向の研磨痕が残る。乳棒形状を呈し、使用中裏面側面から削り落したもの。	
第19回 PL. 11	67 磨石	完形	長幅 7.3 6.8	厚 5.3 347.2	粗粒輝石安山岩	表面裏面とも摩耗する。側縁や小口部には打痕が残る。格円形。	
第19回 PL. 11	68 磨石	完形	長幅 9.6 8.7	厚 4.3 427.4	粗粒輝石安山岩	表面裏面とも著しく摩耗するほか、下端側小口部には打痕が残る。縫間に残る打痕は風化が弱い。	
第19回 PL. 11	69 四石	1/2	長幅 (8.6) 6.1	厚 4.5 340.4	粗粒輝石安山岩	背面中央付近および側面か著しく摩耗するほか、窪み部の2ヶ所が崩向する。被削熱でひび割れる。	
第19回 PL. 11	70 四石	4/5	長幅 9.7 (8.1)	厚 4.5 347.2	粗粒輝石安山岩	表面裏面に瘤状を呈する窪み部がある。表面裏面の摩耗は石理が弱く明瞭ではない。	
第19回 PL. 11	71 四石	完形	長幅 14.1 7.9	厚 4.2 670	粗粒輝石安山岩	側面斜面が激しく使い込まれる。背面側面の窪み部は集合打痕となっているが、下端側の窪み部は漏斗状を呈する。裏面側の窪み部は見られない。	
第20回 PL. 12	72 磨石		長幅 15.0 8.9	厚 5.0 1075.1	粗粒輝石安山岩	表面裏面とも摩耗する。先端側が研磨するほか、背面側に数ヶ所の集合打痕がある。打痕の風化は弱く、煤も後世に付着したもの。	
第20回 PL. 12	73 砥石	破片	長幅 (6.8) (10.3)	厚 2.9 192.0	砂岩		
第20回 PL. 12	74 石皿	1/4	長幅 (12.4) (15.2)	厚 9.6 1913.6	粗粒輝石安山岩	脚付き石皿の破片。脚部は1cm弱あり、また外側面は櫛の削形を切断するよう、素材の変形は著しいものがある。石皿の縁から機能面まで、ここまで深く研磨るのは容易ではない。	
第20回 PL. 12	75 上飾器 台付甕	口縫部片	口 16.0		細砂粒/良好/に よい黄褐色	L/R縫部はS字状を呈する。口縫部は横ナデ、制部はハラメ、脚部側面部下端に機能的ハケメ、内面は脚部にナダナデ。	
第20回 PL. 12	76 上飾器 台付甕	口縫部片			細砂粒/良好/に よい黄褐色	L/R縫部はS字状を呈する。口縫部は横ナデ。外面の一部に保付。	
第20回 PL. 12	77 上飾器 高杯	杯部底座・脚 部上位			細砂粒/良好/に よい黄褐色	杯部と脚部の接合方法不明。外面はハラナデ。内面は脚部にハラナデ、杯部は器削面のため不明。	
第20回 PL. 12	78 上飾器 台付甕	台部片	底 4.9		細砂粒/良好/に よい黄褐色	脚部と台部の接合状態不明。脚部・台部ともハケメ。内面は脚部側面ともハラナデ。	
第20回 PL. 12	79 上飾器 甕	口縫部・頸部 片	口 15.9		細砂粒/良好/赤 褐色	外表面はハケメ後ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。	
第20回 PL. 12	80 上飾器 杯	1/4	口 12.1 11.6	高 4.4 11.6	細砂粒/良好/橙 色	L/R縫部は横ナデ。縫下から底部は手持ちヘラ削り。口縫部はほぼ直立する。	
第20回 PL. 12	81 上飾器 杯	口縫部片	口 13.4		細砂粒/良好/に よい褐色	L/R縫部は横ナデ、体部はナデ。	
第20回 PL. 12	82 上飾器 甕	口縫部・体部 片	口 11.2 10.8		細砂粒/良好/橙 色	L/R縫部から体部上位は横ナデ。内面は体部にヘラナデ。口縫部は内傾する平坦面を作れる。	
第21回 PL. 12	83 上飾器 杯	口縫部片			細砂粒/良好/燃 し/黒褐色	L/R縫部中央に段が盛る、所謂有段口縫杯	
第21回 PL. 12	84 上飾器 杯	口縫部下位- 底部片			細砂粒/良好/燃 し/黒褐色	L/R縫部は横ナデ。縫下から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にやや難いヘラミガキ。	

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 類	出上位数 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第21回 PL.12	85	上師器 壺	口縁部-胴部 上位片	口 15.0	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部はハラ削り。内面は口縁部の一部に 横方向のヘラミガキ、胴部はヘラナデ。		
第21回 PL.12	86	上師器 壺	底部	底 6.0	細砂粒/良好/赤 褐色	底部と胴部はハラ削り。内面は器面剥離のため整形不明。		
第21回 PL.12	87	上師器(ミ ニチュア 上器) 碗形	2/3	底 4.0	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	底部には木葉痕が残る。体部は下半がヘラナデ、上半はナ デ。内面はヘラナデ。		
第21回 PL.12	88	上師器(ミ ニチュア 上器) 碗形	口縁部上半欠 け	底 4.1	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	底部はナデ、体部から口縁部はヘラナデ。内面はナデ。		
第21回 PL.12	89	上師器(ミ ニチュア 上器) 手捏ね	1/2	底 4.7	細砂粒/良好/灰 黄褐色	底部はナデ、体部から口縁部はヘラナデ。内面はナデ。		
第21回 PL.12	90	上師器(ミ ニチュア 上器) 碗形	底部-体部片	底 6.8	細砂粒/良好/橙	底部と体部はヘラナデ。内面は底部から体部にやや強いヘ ラナデ。		
第21回 PL.12	91	上師器(ミ ニチュア 上器) 碗形	1/2	口 6.6 底 4.2	高 4.7	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラナデ。内面は底部から 口縁部にかけてヘラナデ。	
第21回 PL.12	92	上師器(ミ ニチュア 上器) 碗形	3/4	口 5.9 底 5.0	高 4.6	細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラナデ。内面は底部から 口縁部にかけてヘラナデ。	
第21回 PL.12	93	須惠器 壺	制部片		細砂粒/還元焰/ 灰	外面上には平行叩き痕、内面は同心円状アテ痕が残る。		
第21回 PL.12	94	須惠器 杯	底部	底 5.9	細砂粒/氧化焰/ 橙	クロコ整形。回転は左回り。底部は回転糸切り無調整。		
第21回 PL.12	95	肥前磁器 染付皿	1/4	口 - 底	高 3.4~ 3.6	灰白	口縁部は輪花か。体部外面に唐草文、内面に模様文。底部 内面の文様は不良。高台1重圓錐に器。鉢は残存が一 部で不規則。高台はやや歪曲。	17世紀末から 18世紀中葉。
第21回 PL.12	96	肥前磁器 染付碗	底部3/4	口 - 底 (4.0)	高 -	灰白	外面上に雪輪梅樹文。高台内不明路。	18世紀中葉か ら後葉。
第21回 PL.12	97	肥前磁器 染付透利	1/4	口 - 底 (11.0)	高 -	灰白	残存部分の体部外と高台に1重圓錐。高台端部と内面無 施釉。高台に燒成前の欠け1カ所。	18世紀から19 世紀前葉。
第21回 PL.12	98	明・石 陶器 すり鉢	口縁部片	口 - 底	高 -	赤橙	体部内面は回転笠削り。口縁端部内面の突辺は丸みを帯び る。すり目は口縁部まで施した後、口縁部下を擦で消す。	18世紀後葉か ら19世紀初頭。
第21回 PL.12	99	明・石 陶器 すり鉢	口縁部片	口 - 底	高 -	赤橙	体部内面は回転笠削り。口縁端部内面の突辺は丸みを帯び る。すり目は口縁部まで施した後、口縁部下を擦で消す。	18世紀後葉か ら19世紀初頭。
第21回 PL.12	100	須・美 濃陶器 すり鉢	底部1/4	口 - 底	高 -	灰白	内外面に鏡釉。体部内面下端に目跡2カ所。底部の回転糸 切りに取り直し痕あり。	江戸時代。
第21回 PL.12	101	須・美 濃陶器 すり鉢	底部完	口 - 底 5.0	高 -	灰白	体部内面から高台筋に筋釉。底部内面に蘿灰斑状の釉が認められる。高台筋以下無釉。 回示する所は高台筋以下無釉。	18世紀中葉か ら。
第21回 PL.12	102	鉄滓 碗形片	1/2	底 8.8 楕 楕 5.4	厚 3.2 重 281.6		メタなし、磁性10mm。下面に1cm角前後の謬が見られ る。砂は少ない。断面には木炭痕跡が確認できる。一部上 面にガラス化による光沢が確認できる。澤質は密。	

第11表 保護課立会調査による1号堀と2号堀及び遺構外出土遺物

種 因 PL.No.	No.	種 類 器 類	出上位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第22回 PL.13	1	礪文土器 深鉢	一括 体部破片		細織維-石英-輝 石-白色粒/良好/有 鉻色	「良い」寸線による斜格子文が施される。地文は横位条痕文。 内面は弱い擦で調整にとどまり凹凸が顕著。	早期後葉
第22回 PL.13	2	礪文土器 深鉢	1/2 体部破片		粗石英-白色粒/ 良好/明黄褐色	退避化した浮線文か。細かな横位刻文と矢羽状刻みを施 す。地文は横位R L。内面弱い横位擦で。	前期後葉
第22回 PL.13	3	礪文土器 深鉢	1/2 体部破片		粗石英-白色粒/ 良好/明黃褐色	垂下隣綴による懸垂構成か。2条の沈板を側縫とする。 地文は無層R 崩位施文。内面平滑な擦で調整	中期後葉古
第22回 PL.13	4	礪文土器 深鉢	一括 体部破片		粗石英-輝石-白 色粒/良好/に ぶい黄褐色	細沈綴による分岐垂重文か。内外面とも弱い研磨を加える	後期前葉古
第22回 PL.13	5	礪文土器 深鉢	一括 体部破片		粗石英-白色粒/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部内面に沈縫を施す。口縁部下に横位細沈綴で 画された施文部を配す。L R を充填する。内面丁寧な研磨 を加える	後期前葉新
PL.13	6	須前磁器 広口碗	底部破片		灰白	内外面に染付	18世紀～19 世紀
PL.13	7	在地系土器 内耳鉢か 小片	体部小片		灰黄	体部上半か。凹凸顯著。外面器表は黒褐色	中世か

写 真 図 版



1 1区全景(北から)



2 2区全景(北から)



1 1区1号堀全景(北から)



2 1区1号堀全景(南東から)



1 1区1号堀西側土層(東から)



2 1区1号堀東側土層(西から)



3 1区1号堀底面(西から)



4 1区1号堀周辺(東から)



5 2区2号堀全景(東から)



6 2区2号堀全景(南東から)



7 2区2号堀土層(東から)



8 2区2号堀周辺(北東から)



1 1区1号土坑全景(北東から)



2 1区2号土坑全景(南から)



3 1区3号土坑全景(東から)



4 1区3号土坑遺物出土状況(北から)



5 1区4号土坑全景(北から)



6 1区5号土坑全景(東から)



7 1区6～8号土坑全景(東から)



8 1区7号土坑全景(東から)



1 1区8号土坑全景(東から)



2 1区9号土坑全景(東から)



3 1区10号土坑全景(東から)



4 1区11号土坑全景(東から)



5 1区12号土坑全景(東から)



6 1区13号土坑全景(南から)



7 1区14号土坑全景(北から)



1 1区1号ピット全景(東から)



2 1区2号ピット全景(南から)



3 2区3号ピット全景(東から)



4 2区4号ピット全景(東から)



5 1区5号ピット全景(南から)



6 1区6号ピット全景(南から)



7 1区7号ピット全景(南から)



8 1区8号ピット全景(南から)



9 1区9号ピット全景(南から)



10 1区1号堀調査風景(南から)

1号掘



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



19



20



22



PL.8



2号瓶



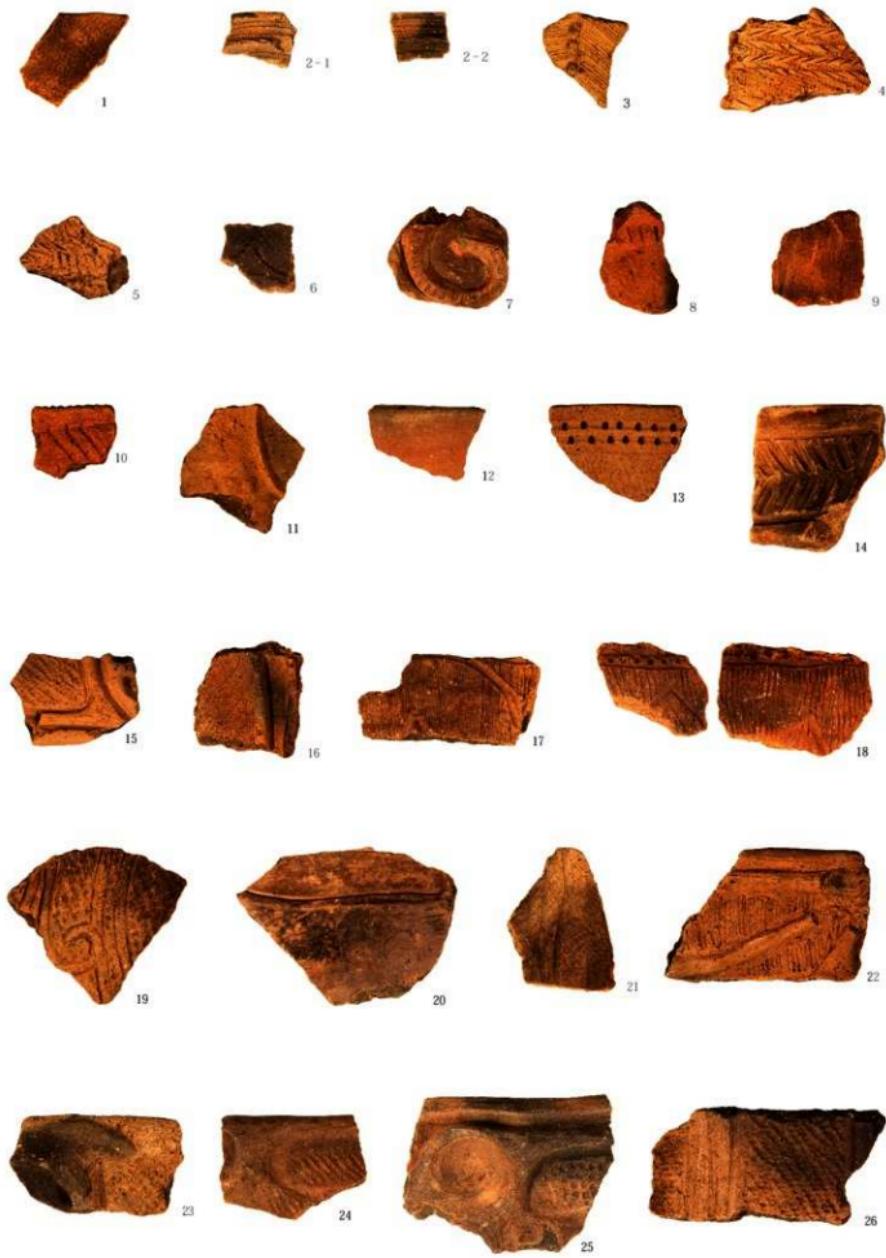
3号土坑



11号土坑



遗物外遗物



PL.10

造模外遗物



遗物外遗物



PL.12

道橫外遺物





1 梨木香林線 立会地点全景（北西から）



2 梨木香林線 1・2号堀断面（南西から）



3 梨木香林線 1号堀全景（南西から）



4 梨木香林線 1号堀全景（南から）



5 梨木香林線 2号堀全景（北西から）



6 梨木香林線 調査風景（北西から）

保護課立会調査



報告書抄録

書名ふりがな	まえはたけいいせき
副書名	前畠K遺跡
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	690
編著者名	山口逸弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20210721
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	まえはたけいいせき
遺跡名	前畠K遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんきりゅうしにいさとまちの
遺跡所在地	群馬県桐生市新里町野
市町村コード	10203
遺跡番号	B0183
北緯（世界測地系）	362415
東経（世界測地系）	1391431
調査期間	20191201~20191231
調査面積	439
調査原因	道路拡幅
種別	集落/包蔵地
主な時代	縄文/古墳/平安/中世/近世/近代
遺跡概要	縄文 - 土器+石器/古墳 - 土器/平安 - 土器/中世～近代/陶磁器/石製品/鉄滓
特記事項	大型の1号堀は当地域の灌漑、地境に関わる開発遺構か
要約	中世～近代の堀2条、土坑14基、ピット9基を遺構とする。いずれも当地域の該期景観を具体化する資料である。

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第690集

前畠K遺跡

一般県道型木香林線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和3(2021)年7月14日 発行

令和3(2021)年7月21日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県邑楽郡北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社開文社印刷所
